

楚辭

四



くんめと顔と思ひ討るこそ不覺な色也我何により初をハ後しん初てう矢の
 赤は文々々又何れけり口唇唇より合んぬらめ是をうの種でと懺悔^{サシゲ}して澄
 脱^{ヌギナキ}置り切れ杖をつきお家^{サナリ}の身とぬしき茶代未曾有と人ひりくる
 山名宗全云云せしは依て茶^{サシ}と相を現^{サシ}卿を都と即^{サシ}と有て赤雲のふく
 山と在るふが日河と通はるる

流色ゆく身を 石河の水の流るゝ處にありて
西条田に關山の程も心細く 哀しき

出^デ紫^シ建^{ケン}而^ニ東^{トウ}望^{バウ}山^{サン}岳^{ツク}排^ハ雲^{ウン}根^ネ之^ノ暗^{カミ}隣^{リン}羽^ウ卒^{ソツ}山^{サン}嶺^{リョウ}而^ニ西^{セイ}方^{ホウ}顧^コ
 家^カ鄉^{コウ}盡^{ジュウ}沒^{モツ}烟^{エン}樹^{ジュ}之^ノ深^{シム}無^ムの言^{ゴン}ととてわづらへり哀^{アイ}は頓^{トン}阿^ア法^{ホフ}
 師^シが起^キの山^{サン}上^{ジョウ}徒^トも実^ミはこころとけしと彼^カと最^{サイ}心^{シン}細^ホくお録^{ロク}する
 古^コ今^{イマ}をうめごとく中^{ナカ}り是^{コト}をうめあめなくねと雲^{ウン}な間^{マタテ}そ

[illegible]

流さるる名どよとるのきあけの水の傍は身を溜めると
斯波江を捕まへて名都より人なきよと水に顧みえり
まがをいつらきけりとてみえり
まがをいつらきけりとてみえり

仁本は進助義冬と一多命ひ命尚直とと多集のなとと相別じ契の中と
不^り淺く何ぞか時^{しぐは}もと道の程ゆえなしとと大澤お坐の辺あづつきとありける
ごに色うう南北へ引別るゝとと義冬

高直
一
し

三つふくまゝ海をたぐひて
 今坂のせきより下へ下へ
 下へ下へ

ふゆ年とあはら
ナキ子
雲探のまなうて何
やと云をよみていふるべき

さへ細川の勢が六万山居が徒黨十一萬東面は別色目い合戦勝後より一萬年一が
文明五年三月より全卒去せしやど細川方大に力を増す常と鯨びるが勝えむ
月この五月に小卒去せしやど西黨は徒黨十萬對陣して去らざるが
文明九年に至るは天下太平の代はとありき

文明九年ノ冬ノ際ニ天下太平ノ代ハ与テナラズ

の徒太

後花園院
山陽河の時
兼政公
一着の序と
拙うそ
天子頼
深ひなる

あびやうき雲の「なる歎きとて天ヲとて濡る被る耶

續太平記

山石入道事全成大に家なる事とて近代秘宝なる諸人其より一と採振し、
語とてゆらける所良亭の大信古き例と知らひて振くがこく中心なる事
事全極く常なる若し色ば臆しるは色となく中傳の八君の信を事一
性多しとて色と知らるる事とて例とひく事とて例とひく事とて例と
云文字とて例とて文意とて例とて例とて例とて例とて例とて例と
の例とて例とて例とて例とて例とて例とて例とて例とて例とて例と

沙汰と伏しを考ふるも勿論ぬべし。又、和國神代の天位お流きくる所の光と
 云く建武元弘の時代迄を以て法とせしむべきなり。此後君公とし
 禮節とハヒを承らるゝ古、大極殿のことく、何の法權ありと云例と
 用ひて後は主殿といふに至りて是是非なく又別殿として別すべき事
 又、別殿の時ありても、後代に失せといふづゝやあぶきを凡そ例と云
 ともその例之大法不易政道と云例と訂する所なるべし。其外の事ハヒ
 さうも例と別々なり。心持バ一概は例と泥す時を知ざる所は或る哀微
 門家よりしく或る地位の之競る中こそ其勢多といふべし。然レテ終
 武家は恥しうらく天位と尊厳とを失はし強き古来の例の
 文とある所は其の家全下さこの正史若く對して如斯く曰わすの儀と述ん
 や是れとも古来のつきの代の例とや是則時あるべし。我今云如おれ等
 と云へ又保後世は我が場愈の者とも云ふにあぶるべし。其時の弊よりい
 へる者も亦そのことばとなさるゝと云へし。なほ後のため、心も心なき

妻より白ひて殺分の例あるを言ふに及ばずし時を知らず身不肖なりとてども
字全が傷と云ふ一なるは君公の御執りしものなりと若くはけさば恨大

江が塩津の住人よ盛谷備中守直純 其時より筆を文武二道と嗜み其性清白
子として常々汲黯梁鴻が為人と慕うて出来し由來私に政要簡篇と云一巻を
綴て享寧二年秋九月日と書付て密に内侍より達しける其申す所心は
實にと云ふ事しを能令件名と云ふなりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
さし將軍 政を身取ひて凡そ非其臣 傳ふこれと潜從のあれといふ
訛に當せし扱是非還て危人と感ふに旗金口所の緊執一違俗で
輒皇憲と蔑と云ふに復王條の所重禁也 渠小臣とて大長と刺
戾くの然一なるは五刑に處しけるに飽足し難し斯る推条の者と云は
しや金に云ひて白ひて膝がしと云ふ止めりて身と云ふ事と云ふ事と云ふ事
ある醜もやんといふと其陵の事た宮内卿常色大に移動しけるを傳説

のひとと云ふと多し事と云ふと人 孫亮の事と云ふと多し 孫亮の事と云ふと多し
起涯の跡の事と云ふと多し 少不審の事と云ふと多し 古今の義人暗主と云ふと多し
身より罪に不祥の事と云ふと多し 法也龍寶の事と云ふと多し 被割心の事と云ふと多し
屈原の獨り死する事と云ふと多し 其君靈公と云ふと多し 教島南枝の事と云ふと多し 巢胡馬の事
と云ふと多し 斯る事と云ふと多し 有情の事と云ふと多し 知守の事と云ふと多し 長人の事と云ふと多し
久安相国と云ふと多し 事と云ふと多し 為國の事と云ふと多し 可成の事と云ふと多し 我は人仕と云ふと多し
参りても云詮しは此の事と云ふと多し 山崎の事と云ふと多し 世の事と云ふと多し 耳と云ふと多し
はと云ふと多し 古事と云ふと多し 我の事と云ふと多し 柳の事と云ふと多し 柳の事と云ふと多し 柳の事と云ふと多し
信は 是非世間許多の事 出家端的是 安住今日委恩入此境
從前不踏来時路

夢やうも何人あつてもいふは元々の元々の名は沙汰
如くは流しつて我田宅と云ふと多し 高野山と云ふと多し 夫と云ふと多し 帝城と云ふと多し 帝

百七十余人を討しつゝ其を六帝隆元再び細川の家督と相統せらるる三母長輝
等政事と専らしむるを元永正事申す

一 大内義興は永正事申す

古来より斯波細川島 威と天下は振るをいふ享禄元年十月廿日病死し其子

十二年とすをいふしをいふ人々名枝桑六十余列は洋流し買渡をいふ

とありそのいふ和舟の道すましかひ比叡山の雲のすけか上へ敵すをいふ

為民の記はいふをいふ記を 文の書文 從四位上左大臣多々良美興

いふをいふをいふ吾妻の富士の根とくをいふこの雲の明はの

けり天聰は及ぶをいふと勅令と降らしを 文の書文 御制衣

雲は光し山をふ二の根言のその代りのその名と雲乃上より

一 細川常桓 初名高國入道 天王寺の合戦は折原尼ヶ崎にありて其時常桓現判紙と

ありて遂は自害せりしをいふと時常桓現判紙と後々て日ひ眠りし

方へ文細やうとあり

徳撰

なりといふ又いふ言のそのや 法のまゆ ころろろろん

道撰

大進四今一とびとふひこしつよしハ唯 徒は ころそ

御所撰

終るうへしと作し海山と後の世までも目かきぞとらん

徳愛の婦の許へ

世浦の浪よりうきき 浪石の世くは絶せびまなへき

明侍者へ

世の才は送ふてふ事なまきめれと送ひてふ言のま何

宗碩へ

夕立乃 定まこのりろろが 舎りうね

是とお座くべき由くまねに全腰十文字、切ても伏せざる付城ひたる家入時村
 貴則めり有ぬ口惜き心外れと嘆と切くまねに、歎二人と訂よる石の腰ツキまい
 校ど、河水に死入ぬまゝは、貴則ツキ七ツキ更ツキ化し、蟹とある、世時村蟹と云と、や
 一尾、陰酒古事記の本書、七月、書十三、
 尾、陰酒古事記の本書、七月、書十三、

的身命と不情、防戢しるるを輒^{スラ}あぐさとして入らざる。傷之。經久の婦子民衆
左衛門政久後方の何より來り付城の矢倉より楊調と喚びし文は月よ々と
澄し残星幾點雁横塞長笛一声人倚樓と吟せられども林木を走ぐ
為に揺動し山石と忽ち破列裂きんとや人華山の如くと凝らし胡谷
北夷の如くとけし所に入道場中へ是とぞて向ふ嶺の音のいと面おく
ゆりのいづる政久もぞ有らん世人をえん上洛せむし時ある留の上より
とあり有りは信く林表よりみえて御遊の新衣を留の役と勤らむと
ゆくを哀れ定免の事。我射獵は放て下ヶ計杯と云ひ射介はんといと
是ういふものして政久と射するやと思ひたるが水中の色はいづせん。

業じらるゝ急な如くおし一村の有りて白昼に移り、何處の矢を
 矢と射入るゝ十策は十策射込るゝ相をどう作は射せんやと思ひらるゝもの
 と何れの年の事なぬ矢はけ作の刻目と心標し、毎日の事とするは
 は九月六日の夜又留の事れゆくは宗的の敷の中へ忍び入り、兼し心毛、
 矢をどうするゝ引くやうと致さぬ城の矢を射込るゝ改久の傾く月乃
 名河と惜み、所をどうするゝあやうに射中とせば改久を首とがし、投
 擲して伏せらるゝを知らぬ意にいつゝと用意し、け作は経久は告りて大に驚き、
 計策よと救急の療治と追加するゝ大鷹侯として喉のま中と射
 ころし、事なぬは所は取去せらるゝ今廿六日とぞし、改久を思ひの中へ
 阿ふが仕事と大に思ひ、急な城と取戻し、城中の者一人もあらず討取べしと
 切に射れどもがしと不用とらるゝ城と取戻し、宗筋と致し、討取るゝ
 三百餘とぞすし

人
乞利元就有田合致、武田元繁と討たるに、れを武田の麾下に有る者、カカフ

降々空ひたるハ我勝す武運を人々の為に我の身とせしむるに惜み今を
とすは只の金車とゆひては愛す一所迎と取中なる事のは是を同途せし先
づ二條華金殿のも君又為息新女などの事何あはれ臨し金甲斐
なき命助すよしく都へ送りよき又阿の新女とて僧法師とてを我
後の世と事らむを流ひつゝををせし和尚快く飲養し心安く思ふといふ
ありしと内平助けありとせしと中一やと美陸郷今を心安しと飲び
まひる形と和湯湯漬と出上り色を各と食しを時冷泉判官
隆豊世人の年の美陸郷となく
諱よりし忠義の人と著取車し日次諱めよりし事内家判官
を今める有死ありし事のは惜しと所死と都て陸郷と刺違へる
よしめ琳聖大内ハ琳聖
をの末孫との血脉とてを中よりしと海と流しをれど
天野為丹とてをせしめし打受の運にめをさしと此處と心
机と中よりし事とを老いし形の時をさしと此處と心
よりし事とを可被中今所最期は及て君の所死とて後悔あり何

事ぞや中今とて敢てありしと討死ありし何とて思ふんさしとめ
象殿とてめえしとをさしは判官諱と詮めし事と中よりしと所死
こそ知しとめえしとをさしは判官諱と詮めし事と中よりしと所死
吾等と一ふの眼志し信て修羅道と生と受け八萬四千の眷属ケンブツに依
ふくハ三年とてハ七年の内は陶子頭タウジとて獄門は晒しと眼と此と
半し蓮と切しと形状ケイサマ修羅道と三日と部とを思ひしとを
をるる流石相傳の主君と色ばたなく攻めしと唯とくし所自害あり
わいしと美陸郷とてを自害すべしとを思ひしとを
あり信奉の人とてありしとを思ひしとを

從二位冬良美陸郷

討つと討つと満ちし如露亦如電應作如是觀

從三位冬良美陸郷

秋風也まき原は吹荒く恨も減る雲乃くくやと

冷泉別官後原隆豊
云々云々 夢と雲と天と云々 風の末と云々

ふたつの酒の秋の夜と云々 志の秋風
畠山右馬次隆系

末の夢の中と云々 夢と云々 志の秋風
畠山右馬次隆系

不來不去 無死無生 今日常晴 峯頭月明
天野藤内隆良

吞却宝剣 放下名号 只有斯景 一陣清風
小幡四郎茂實

夢亦是夢 空猶是空 不來不去 在端的中
黒川近江權守多良隆像

称宣民部丞右信

風と雲と 夢と天と 夢の中と云々 風の末と云々
太田隠岐守隆通

秋風の末と云々 夢の中と云々 風の末と云々
畠山右馬次隆系

有時自空 有時又還 清風度水 明月在天
畠山右馬次隆系

かゝる義隆卿腹一文子と云々 検校と云々 冷泉別官後原隆豊と云々
不敵所有打ちしと云々 隆豊と云々 初と云々 夢の中と云々 火と云々

てお幾留かりと云々 夢の中と云々 冷泉別官後原隆豊と云々 夢の中と云々
の色は太刀の末と云々 翳し大勢切伏と云々 夢の中と云々 經書の中と云々

走り入り立ちぬと云々 腹十文と云々 切腹と云々 夢の中と云々 天井と云々 柳付自カウ喉と云々
検校と云々 夢の中と云々 血活と云々 夢の中と云々 夢の中と云々 天文二

十の九月朔日と云々 月日と云々 大内と云々 滅亡と云々 琳聖太子の苗裔根と云々
夢と云々 枯しと云々 夢の中と云々 柳陶隆彦の妻と云々 殺しと云々 夢の中と云々 一羽一羽の

奉り殺軍後此ハ之と作り能く物色する人よきこそは門閥と云へば大將のさるべしして不叶い事也上より言ふハの内にて軍はぬまんじつるま公の押さず身命をきて二ツの道なる所なり七ツはむろのさう作りよく言ふらんと忠義忠切となづけ武家にはねえやうな奉公と云ひ此忠義忠切の者は知れど下なる諸人道理をとて少くも恨むべきゆゑのし世のさう中切の侍とも大方はあらず仕りきるとその上のま公人は知れど下なるさうさるものま公を命はお違なくして作り能くすらすと惟といふを分明言ふ所より多き色も後はそ一人を不赦よく言ふといふはねえ知れどもなるかま公能くせられ不厭にさきんゆそこち師の前ハあたるは我等とは揚々でたとへ恨み入ぬこそ不厭なりうやさきゆども諸人大將へ恨み置へばとおとが異見の中いた大内殿中阿ける

毛利元就此大内家の幕下よりおとしをれど遂に陶と討んと振ふ山と砦うれ
 ちるごころを為し國を條田日市の西南なる杉山城と攻取まべりと押寄らる城主
 平賀新四郎隆保大別侍よりをぞ依附して申く為さるる色元味も大體そ
 め痛く攻まりをれど遂に杉城中に難く平賀新四郎大内和泉守兩人切腹して
 諸卒の命は可代と望し中をれど元就則ちと料寄せらるる是より依りて平賀と城中
 まで就ち自害せんと申し時依錯の者より吾し首おとせんとせし咎莫し討しとせし
 刀を振て西よりハハハ識田中下阿字之一刀生死又截涅槃又截と唱へ腹

十文字より破り 腕を縛り 膝あし寸々切捨たり 色も些とよめる 糸多
しとし 梅人より 白く 腹捨切り 死ざる者なし いふべきは 此隆保を 死ざるやん
最期の手詠べしとして 硯の香を 手にとり 死する

つうとひをといふんと云ふとて
假初の言のそを

平賀新屋帝隆保二十三歳代諸士之命自裁之後命未断於茲詠焉
 天文二年九月二十九日と書くさてその後ちやく首うてと云ふ事ども歟諸人後より
 水とてありは折るは世隆保を柳原大納言資定卿と仰とて山より知る
 と云ふ得し如形を述べて今も期は臨くと詠じ多事日來亦積の功
 顔色とのみなりは常と云ふ文字身解は充滿とてし故等の勢は平生は
 望とも遠くより大林和泉守の隆保が自害と見ると平賀原の天啓は折と
 る者も吾の老いにありゆいてゆいて漸く振あはちりゆいといふ一文
 字は切ると云ふと云ふ事ども歟のし月とて討つるからて城中は平賀の
 士卒は悉く命と断るなり

野の所眼筋と親りのふあそを根籍かきおく下馬せらるよたなくハ速マ
 りハ跟斜^{ミヤダ}どと云まれの惣治めくハ打突ハ吏部の下馬の制法とて雲伯の馬
 誰々^{スミヤカ}咎じいづん我等も能くと能得ていぬこ馬子をもあつて牛は安
 久^{イリウチ}馬^{ラロ}えう下牛と所下知くこ下馬と水ひひつるる々又下馬所の事ハ
 ねこそはるる交れと荒らぬ云ちし親りへ主あふ唯一抄せんとの条
 色より三尺八寸のおりの柄小縄と云に荒くと巻ると握って三寸計り振
 け大の腰と活とん電とく形^{アリサキ}状^テ叶^フ振となく若黨元交角りたるや
 為事よしぞと久又子ハあまをれた晴久を軍功と賞せらるさ知ぬ
 親^{オノ}下^タ所^{シヨ}ら^ニ色^ニ一^{ヒト}色利元就けひなるものにて尼子と亡さんと心肝と云當
 てるが射人先射馬と云事ともひ出し晴久と國久父子半ハ不知ぬ
 謀^メとゆゑさきられず晴久はほかの條は後ろくむ久謀久敬久又子三人と
 將やらさるる是より。こを子家のあらゆあおとらへたる

一 厚子家十勇士と号し、山中鹿之如藪原茨之如五月お苗之如上田稲家
之如を道深之如子川鉦之如川岸柳之如井筒止之如阿波明之如破骨障子之如之
一本十二月
弘治元年十月朔日毛利元就の謀計は依て陶尾張守晴賢入道全薑(キヤリ)三万余騎の
勢薙去り嚴密に防ぎ毛利家僅三四千の人數に討負るゝ遊に入道と自害
せしむしが其有様を傳へずに入道も完(マツ)めり肥たりと人々色をもけあまほ
心ある所の石上守備将を休ませし時、伊香賀民が捕中なるハ歎かば
爺後は満ちて味方の船多一艘と云ふ金薑公をいづと思ひやと云れ
入さそと可き通達(トウチ)なし唯自害するハ介の事にあじ相と吾日來
以(テ)寡(ウラ)挫(コ)衆(シユウ)數ヶ處を知ると今三萬の大軍をひく元就が三四十の將より
廣く軍(タマヘ)吾と亡きことと云ふはあつた言ふところと程思ふことと云ふと各々是
迄我は分限ひえ進を止むるを得ず佛は甚深の志報謝をす余あり元就
ハ吾望を何の自害の後服切し軍兵有入道が死體と能(キ)き子細(サカ)き至而
ハ何年命を全くと謀と由らしを知を討て我が仇と報せよ努(ツメ)くける

さるば一曲謡んとも書いとる。五裏減色の秋夜をやる本のまゝ乃
 孟飲酒を谷水の流うとよと汲川水上を秋なる物とある。時と今こ
 そ限りなりとんと現ひされど入道とて山崎を飲世宗梅と相傳とゆく
 乱舞の動能世に所知りたるおまゝある。鑑ひひしつゝ事とをる
 蓋と嗜む事れ流きと服ひの胸裏は常と云字の踊るあゝと大さゝ感
 一我と今毫の歳の首達し一さし年べとと腰の力と膝をえん。醫し
 音なるかゝ揚る。雅俗のふもそんよりいと足定を腰一文字は橋切
 とそ低は順経道はあらこちのそとある青海苔山の雪跡とびとび
 高くと年酒のそとそと満ち梅と唯今の霜をる。ととく獨り
 角あくとそとへ鳥の鳴ぐと執り入りと招きし形勢とさびし年とや
 べき中うとそとと。おは思まううとととや
 能あゝあゝも流るゝされば飲世宗梅と新毫の祝儀よ。修治あるはるれ
 嶽はまゝ雲のと。雲と雲は流るゝしととと。奇特の事ととと。唯今の

所傳意を天地の勝者として一日に感得せしめて全蓋石上を居し嬉世
 のあり

何故惜み何を恨ん
名よりと世をさるる定まる身に
と柳をらるるれなき数段と流にたきば又山雪
幼解由
有とまゝなしたるもとさひと
迷ひなきは惜りさるる

垣吳仇汝守房精

莫論勝敗迹
人我暫時情
一物不生也
山寒澗水清
修養愛民如赤子
補隆正

何喬遠以少輔陞正

思ひきくみとせとわし山根の折ぬ。けんと君よみんとき
 かくとんくの志と吐きせれど入道大まきと感じやうも佐渡寄ぐ人我の情と放
 擲ちる意執畧那の志知識ちうも則若槻と云服刺とちうの腰突
 立矢く親とわけて曳やうとちうとわけ又た直し心やう押立下一寸と押
 下腸活とちうせば伊香賀氏処見事ちうも山根、あやとちうと不敵た刀振上

とてし前々よりて後より民部を重候太刀と御下、抛捨入道の死骸は
取付根と殿の縁組の中より一日行時と不立離仕、より逐々年月一様
びりあふとて此尉、年積り數傾くとも忘るべき事、まのそと、又
近年の西国金奴の別將と唱へらるるは、ひしめて中國をも書中より法
運とてとて、今かく業の介小部、打負ふ事、の惜さよ、吾こを、
まづき守の却て、のかけ、つる事、れ恨み、さよと、あ、計り、は、後、お、り、行、狀、
理、ある、後、その、時、恒、山、海、ある、民、部、心、弱、く、と、なる、お、め、と、制、り、色、と、民、
部、主、あ、つ、入、道、の、被、忍、つ、つ、小、部、は、首、と、つ、み、書、は、湯、て、谷、川、の、岩、根、を、穿、
つ、る、岩、つ、押、こ、め、本、の、ま、を、め、け、つ、も、隠、し、る、お、山、崎、垣、茶、あ、人、ハ、所、傍、祇、却、
お、でも、朋、友、の、盟、を、不、信、と、する、あ、ま、を、執、て、名、邊、つ、も、死、つ、つ、る、民、部、
そ、と、ん、と、何、し、と、別、ち、る、死、骸、ハ、入、道、殿、の、別、る、色、と、あ、の、ま、と、皆、常、と、
感、稱、し、入、道、の、事、履、取、つ、し、是、ま、向、ひ、海、を、知、少、な、れ、だ、故、命、と、あ、ふ、と、多、程、
の、ま、き、有、ま、し、き、と、思、と、云、ふ、は、い、一、為、ら、し、を、何、人、足、る、民、部、ハ、何、と、入、道、殿、

と一、下、は、自、裁、を、と、る、と、沙、汰、を、し、さ、れ、ど、吾、き、と、お、あ、り、其、子、お、め、を、吾、愛、
お、る、自、害、せ、だ、入、道、も、字、を、世、所、と、し、ま、つ、つ、と、歎、息、と、付、て、由、ある、と、思、
死、骸、を、し、る、の、ま、い、は、さ、ば、入、道、殿、の、ま、を、と、ま、事、ハ、一、日、と、人、は、お、め、を、じ、と、お、
ど、海、に、す、ま、痛、く、し、と、思、し、候、ま、う、向、し、と、思、て、我、身、を、二、三、所、計、り、後、進、へ、走、り、
死、ま、な、め、ら、服、捨、取、り、の、つ、つ、と、首、押、切、り、倒、れ、死、す、と、民、部、が、死、進、常、あ、
あ、何、り、思、あ、り、謀、あ、り、と、人、感、歎、せ、め、ら、う、う、う、を、後、入、道、の、死、骸、を、
し、と、思、あ、し、え、死、み、子、を、後、あ、り、て、後、世、日、市、の、洞、雲、寺、に、納、め、懸、懸、
孝、養、を、し、ら、せ、し、と、

右、の、一、は、合、致、し、法、部、可、性、と、云、者、と、摘、て、引、き、ま、り、め、え、就、ん、後、ひ、て、は、者、ハ、一、
は、心、に、入、り、り、し、時、秋、ま、つ、と、お、つ、推、し、る、の、三、程、多、の、度、者、に、助、け、を、う、と、何、
の、後、と、ま、の、人、を、と、め、ら、る、可、性、日、以、て、者、不、し、能、く、一、を、お、く、保、つ、し、は、あ、ら、
は、お、れ、と、命、を、助、け、と、有、り、と、思、ふ、と、言、下、は、お、ナ、レ、と、お、れ、や、を、利、の、
一、は、御、命、を、二、つ、と、お、き、し、と、思、ふ、と、言、下、は、お、ナ、レ、と、お、れ、や、を、利、の、
後、引、き、ま、り、と、思、ふ、と、言、下、は、お、ナ、レ、と、お、れ、や、を、利、の、
捕、て、引、き、ま、り、と、思、ふ、と、言、下、は、お、ナ、レ、と、お、れ、や、を、利、の、
止、と、思、ふ、と、言、下、は、お、ナ、レ、と、お、れ、や、を、利、の、
未、だ、と、思、ふ、と、言、下、は、お、ナ、レ、と、お、れ、や、を、利、の、
かく、縁、組、は、お、め、と、思、ふ、と、言、下、は、お、ナ、レ、と、お、れ、や、を、利、の、

声を吐しをせられぬ采女を少くとも鞘あけし提ぐる服刺彼を投捨何し
 殿とて悪口可仕唯時の身よりうきうきとそはち程の所憤りていづく何う一
 足と引ゆべきとを擇くともあやみ隔て兩祖て縁の上より跳ぐ兩
 りを突きひきさし進んてこれに任せんとて居たりと陶ハ堪ぬ人にて黄
 海流海一受て見えやと云と不敢打せられぬ采女が頼み居たりと角
 入道父の氏部を呼て汝子の采女を云と角云とぞ有ぬ事とく汝を
 けれど氏部ハ唯故有と居たり入道汝が子なせばなを不使よりあらぬ
 死骸とてあらざるは信者居せやと云れり氏部ハ電光の一子の事
 ありと云こそ不使よりあひて目くらまやと謂て前後不覚ありと云ふと
 然へる死骸と云くそ死骸は白く碯と睨み惜み汝が不仕其が
 りよあはれと縁より下へ押落し畏く中なるは何の死骸の者居や可
 仕主君の所と悪振中ハ助乳と居りかく因果なる者と親の身として
 何の不仕は世のつぎと云ふとさあはれ舞を退る人諸人民部が心中と察し

まうて巾の詞を伸へてはた民部殿て不孝飲食言笑と名をぬくなりけるが
 夜^{フスマ}の衾^{ムシロ}の痒^{ソラシ}の痒^{チシイ}は涙は深く計りなりけるをさへ入さとの由恨の事と
 かく造次顛沛^{ソラシチシイ}ありと仕る道はあらずなりぬる入道と我々進意あるを敢なく
 采女と教しけるものと悔ひ又民部ぶ程に思ひぬる民部ハ一子と
 教さるなりと事と又よ不恨のこゝ平素仕への道は力とて今入道乃
 最期にこそ此世中自とをなしけるこそ例^シ少き事とてなせと不能^{ツキ}を
 感激と流し流した満座の人皆秋とて湿^{ヌラ}しける

一 毛利家の身方は杉原播磨守盛重と云人なり智勇兼備せる中より大膽闊
 脱多しと不羈キなりとれむ正仕たる家へは家老或と一事のまね杯こそを
 器と擲ヒりて逆くの者へ山城海城等と云ふ心算なる者とて
 此迄なる程は元来盛重と業として世を治る奴原分れぬ欲城部陣は討
 ち掛け或は火をつけ城の隙を突いて臨イ重城一柱堅陣トリヒツ一事は其其負カズラ
 是れより別たる爲の多き故に中より佐田義元等とを擲とて其の上を盛重

の帳本有りたるは、格条は是れ、作田は、此とて、例を、乃、い、う、る、は、作田、が、
了、よ、作田、の、格、条、と、は、者、作田、の、奥、美、と、字、調、と、は、越、昨、の、作、業、出、於、藍、
青、藍、の、色、を、い、何、と、は、作田、が、越、昨、と、は、取、つ、ん、と、思、ひ、或、時、渠、の、宿、入、る、の、
例、の、作田、が、水、を、あ、ら、う、と、魚、の、骨、と、嚙、く、犬、の、ふ、い、と、と、あ、う、る、作田、外、は、
是、と、少、く、い、ふ、は、犬、を、長、地、より、一、尺、餘、と、今、息、の、骨、嚙、音、を、地、より、三、
尺、許、と、い、く、を、れ、ど、頭、下、け、し、流、る、と、い、ふ、色、の、作田、見、越、昨、と、は、減、昨、
の、事、と、い、ふ、越、昨、と、は、自、省、の、思、ひ、と、い、う、又、山、の、帝、と、は、者、是、の、
く、作田、が、越、昨、入、り、犬、の、身、振、る、と、い、ふ、と、作田、大、は、非、と、思、ひ、故、條、
中、の、記、出、と、は、九、山、子、の、い、う、と、立、向、き、り、望、望、作田、外、は、あ、う、り、水、に、犬、の、
身、振、い、の、い、ふ、海、の、う、や、と、同、い、ふ、い、ふ、と、是、れ、作田、何、と、い、ふ、我、記、と、は、と、い、う、や、
九、山、曰、さ、は、有、の、越、昨、夜、久、し、う、と、は、故、の、声、が、あ、う、る、あ、う、る、は、故、の、声、一、
頻、り、雷、鳴、の、い、ふ、お、
我、と、是、れ、系、の、虫、の、文、と、い、ふ、中、は、自、然、打、添、と、い、ふ、し、声、の、聲、あ、う、り、し、左、人、

未、き、り、の、い、ふ、也、動、靜、を、い、ふ、と、い、ふ、と、は、子、細、を、と、は、事、海、邊、に、我、が、
體、と、は、感、じ、あ、う、と、い、ふ、

一 永、録、二、年、元、就、中、村、の、越、昨、取、取、の、時、矣、上、と、い、ふ、は、陳、と、越、昨、と、居、る、と、い、ふ、大、屋、
が、賢、守、兼、賢、一、月、の、程、を、い、ふ、

我、の、う、り、の、引、放、の、矣、上、と、い、ふ、射、と、い、ふ、と、は、也、と、い、ふ、中、の、村、

一 日、の、多、相、浦、を、越、昨、證、信、肥、の、國、版、圖、の、越、昨、と、取、ら、と、い、ふ、時、退、は、難、矣、と、い、ふ、所、
大、嶋、後、を、照、屋、舍、を、氏、那、澄、月、殿、と、い、ふ、引、り、は、故、條、と、い、ふ、と、い、ふ、色、の、大、
島、元、と、い、ふ、道、を、あ、う、と、い、ふ、打、進、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、澄、月、兄、の、照、屋、
と、い、ふ、と、い、ふ、澄、月、の、外、は、と、い、ふ、

澄、月、の、智、し、雲、と、い、ふ、照、屋、と、い、ふ、お、の、が、光、り、を、照、さ、う、と、い、ふ、
と、い、ふ、自、害、と、い、ふ、と、い、ふ、色、の、照、屋、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

假、和、の、雲、霞、色、と、い、ふ、お、の、が、光、り、を、照、さ、う、と、い、ふ、有、明、の、月、
と、い、ふ、と、い、ふ、三、天、の、の、り、の、如、く、な、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

是を返くと其の類多し切く自害をうしむる小川無縁と云者地ありといふ
は流るる水も自傷りゆひとんと詞とをうて流るる水も自害と云ふ身は如石
大に向ひ易滅令心朝露迎易消へるものなりと云ふ如くは易滅
少くして石大を吸物よし如く後ハ供徳寺の住持よとて有る所し提り
ある此際ハ隆信を危きとのぞく善く引くものなり

一 重別富田の縁談少日と雖も其縁とあるは如く色に尼子家
傳代の人多し此人より出る者多ししとあるは津波入道と云者くといへ誰
隠るる人なりと我にあてて義久公 晴久の子 の名途を見果れと思ひ入るる人なり
けるといふ者者の謠言やや津波入子及ふなりといふは義久公の御子なりと或
時諸古の事新ハお津波入と云ふと此の津波入道こそなりと云ふは既に
が足纏より此妻と云ふ縁起ハ退け我身計りゆり居る自害の時と云ふ人
首を斬る元就の捧げ下れる命なりと云ふは如く元就の忠告は
持ちた事奇怪の事なりといふは運命なりと云ふは既に述べた入道は方便なり

やまづさとしの河をば其の分明は如く流るる水なりと云ふは
とあるは隆信の如くは引く入る入道と云ふは如くは流るる水なりと云ふは
と云ふは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは
退けし宿所なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは

我昔事好人の流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは
月ハ押さぬの没る可きなりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは
於る處自害をばきと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは
一日片時も生きて人なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは
と云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは
自害し君の所を愛する人なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは
其の不可有懐結恨又入道なる養の爲の一人と不可供養一
本の草場と云ふ不可造立只造次顔師と云ふ奉抽忠なる義久公武運
をうての如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは如くは流るる水なりと云ふは

一 招永霜臺之秀、天下公ぬのうあを種姓とる方、元来招別は生し豊
鳩と云ふ住しやわしの村民とてありける、色も同く、神鳩山の品沙
つ天と信心湯仰しと属し、糸鉾の政と仰けらる、或時思海のみの物さ
川窪と云ふ、時夜は濃雲の火消し、卯と丑三斗のるな、色は往來の
人、郷と村、里何國と在と云ふ事と、不知、惘然とて在ける、あまの山陰はあ
くま、焼火、灰、あまのくま、急ぎ、蹠、あてん、色は青の、種、人、と葬り、
化、野の、溪の、心細く、立、外、る、あ、る、招永、を、ま、て、吉、山、を、如、泥、天下
万物之萌生、廉、不、有、孔、矣、可、甚、哀、と云ふ、天運の循環、を、目、者、災、代
して、四序と奪し、一、白、昨、り、と、云、と、一、年、明、報、は、ゆ、を、色、は、元、葬、の
道、忌、恐、む、ぶ、さ、あ、り、ひ、め、る、時、水、は、燈、火、を、て、い、る、肉、る、を、ん
今、此、より、さ、あ、事、是、身、地、空、の、所、他、化、觸、る、あ、建、瓚、て、流、水、と、云
と、付、て、我、ら、は、肉、る、事、成、け、る、相、牛、人、極、め、て、食、空、形、を、一、の、食、の、食、と、
あ、ま、之、し、め、り、け、る、邪、と、明、報、と、云、日、れ、る、年、は、色、は、諸、人、と、必、食、と、謂、く、を、

意すといふ、あまの口吻と可い、潤、極、と、あ、り、し、る、葬、所、は、在、る、道、道、の、供、物
を、外、所、有、物、と、云、あ、り、て、新、年、の、祝、賀、と、云、一、ら、る、色、は、逐、日、逐、月、
留、鏡、常、花、の、具、は、逐、事、火、の、乾、る、は、何、れ、る、因、に、意、え、日、の、付、き、と、
葬、所、の、火、と、求、め、あ、て、る、と、云、あ、り、て、直、く、恒、例、と、云、一、ら、る、か、と、云、あ、り、
あ、り、と、逐、一、ら、る、公、市、の、後、見、と、云、あ、り、と、云、あ、り、

一 元子泉の、あ、り、る、言、は、あ、り、と、云、者、と、云、あ、り、る、田、原、城、の、時、時、人、は、出、て、毛、利、あ、り、と、云、二、の、味、を
と、り、伯、列、来、石、の、城、と、云、り、と、云、あ、り、る、城、と、云、あ、り、る、山、中、鹿、之、如、立、原、澤、を、登、上、杯、云、
る、者、毎、び、元、子、泉、と、云、あ、り、と、云、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、
んと、葉、し、る、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、
石、の、城、を、し、る、か、の、傳、説、で、中、の、封、固、と、云、後、い、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、
この、一、字、書、て、獨、り、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、
け、は、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、
別、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、あ、り、と、云、

不忘床くあそび人の形見をきくも跡も通るわづかし何ふと一筆ち也
中にあるあつた對面ともいふ可い見こし中やーと云うを神田母はと多
て梅き山中立示かゝるも惣意はあつたやうに昔の好も涙も吾とい
うてうたふべきさうで一筆書べし破洞あやう古柄小野のち柏と斗り
書てさういふ色はあつた意き多うりて扇と兩人はんせけ色は山中立原さては神
西味もよあつたあつた意きは

石上右衛門のちと柏ととれあつたあつた意きは
と云うあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは

一 一條大納言兼定卿土佐の国司とてあつた意きはあつた意きはあつた意きは
世傳と違ひしなり一筆と全く吾れあつた意きはあつた意きはあつた意きは
天正元年

至てあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは

一 一條でわづらふる紙衣破したるハ所新めきもセバ
又あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは

所屋所のあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは

あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは

あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは
あつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きはあつた意きは

願ふらんハ口惜かんとて敢てせんと言者なりけり色は元來香川長郎を捕
其速と云く汝此道は練る人早く此旅仕を断別武士を攻撃の業のまて
荒夷の如しなど云かんき口惜めふしと言ひし色は長くふりてそ羽の下
りのま羽を輝春継

何ものゆゑにあつた 羽を輝

と何うも色は備人をもつて市正、金白城守福利の意を念ふとて長郎
が振向を断れ威風なま羽没落の機を察せりといふ大に感しけるそ後城遂
は元去——けるとぞ

一 將軍義昭卿をけし大敵の信長と亡さんと云ふまはひるが遂に所を去と遂
にび都る信長の為す都と云ふひとあつて漂泊——といふるが信長の
まをかくるを詠しけり

いふといふまのこの杜の子枝の陰とうき身一のまをかくる
夫しうり此の濱と云く和ある浦と云くを流るる

にどりゆく方と何ふとらうの浦に流のりびのまをかくる

そ後義昭よりけし毛利家前將が信長追討の事とのゆふは熱がひる
一 毛利家傳中國まは城と攻め討城中まの友あま盲人の有りける城取
る人との時おと雲をりおあるまのひあく我前おとつり色をま
承給承給きて討てり後まを死骸と見せけり杖をそやせ井の枝
延母と云くそとらうを有る

暗きうり暗きと道も迷ひし心の月乃 曇りおけ色は

一月ま招きあふ三村元親の御しるも毛利家お困る所は城危急に及
おは遠——とて京都の官政お松山より元親の哀憐と受て挨拶に
ぬき甫一と政をしけり京都よりお松山の長草と云ふ食其食
者何と節義と云ふとんといひきく松山より色を元親承くそ
志と感しけるが政志は是迄と候く——と云ふを更うは甫
元親はめるも——と助けきやといひ流るる城分へ出——と云ふは元と

又あしと罷り切りぬべく耳^{サヤク}とせし甫へ今き不^レ適^レ可^レとあひ流る好
一、道なきは辞せむべし一増一と

松山は酒ちんめれと東の端あてと水のあてさうき身き
と徳と今一肩都もと云ふ文字の中はとる、首とあてらう去程は
元親も家人のものゝ似て一とまど城とあてらうと今いへば
と不思議は松山は入替りる歌の許へ人ときと元親あはり検
使とあてらうし自害せんといふやうに案を三條の就正のそとを来
則元親も對面し松蓮寺といへばひひ湯浴飲食等懸^{子ハコロ}勤し
とあてらう元親も後をなすぬと就正は傍端とあてらうといふと
就正は久き朋友のあてらうをきき易きもの事とあてらうといふ一筆
書てあてらうといふと料紙硯あてらう元親のものと云ふ後をなす
とる形見はなぬといふ書てこそ進^{シタ}とあてらうといふと書るうと後隆系へ文
一通をいへばあてらうといふと是と認^{シタ}う又細川義孝もあてらう末^{キコソウ}魚井澤の

親一みあてはと一肩と送る

いといひき都の月とあてらうといふと元親の元^ノ雲隠れ
井田法平は未得對面といふと黒頭猪子の面^コ顔^コ款^コなりといふ
とあてらうといふとあてらうといふと後^{イタタ}はけ世のまのあてらうといふ
大庭如賢身き深き情とあてらうといふと

あてらうといふと案^ノ計^ノの陰とあてらうといふと表^ノとあてらうといふと
さて就正はあてらうといふと切腹とあてらうといふと位牌とあてらうといふと
思ひ一れどもあてらうといふと道とあてらうといふと本の真^{マコト}とあてらうといふと

とあてらうといふとあてらうといふと八雲案のあてらうといふと入替りひしとあてらうといふと
とあてらうといふとあてらうといふと今一肩あてらうといふと

人といふとあてらうといふとあてらうといふとあてらうといふとあてらうといふと
三村修理亮元親一瞬源樹居士とあてらうといふとあてらうといふとあてらうといふと
とあてらうといふとあてらうといふと隆系乃本陳とあてらうといふと

付らる三村もとて一の毛利旗下の者ぞと信長の威勢は必し仰しやと爰する
者らもなむのべ

一 信長一向宗と合戦の時毛利家の大坂城中へ無難と送らるるが所ある
さは兒玉内蔵元とある所の浦は瀬と繋ぐ川波の洋にゆきわたる
秋の夜半はめく曉けく星霜は尾上の雫とまゆの秋の風はあふれ
爰より先んず櫓枕は砂煙と守り付事おまると熱思しるが相違は
相 嘆曰男子不能流芳百世當遺嘆萬年と云一は思ひ出
おもと又あふく嘆名とては事世は流しやと思ひ出相生の相と伐りて
相中の新しきさはは流しや貫之と住の江の相と相生の相とあはれ
一 酒の石事とある後年ちと一軍お所大明神とささるる恨
るきと人云ふりじが果して身殺なくあ死しるるも若し人作不
若一得難者人本害天必誅之と云ん哲の戒示誠哉柄杓
一 信長本願寺と攻むる時系留備中守天守の向ひ隈と一揆の爲は進まら
信吉のより引退きけきと誰が仕業のやと信吉とある井の原はまきり

武家の敵くらふれぬ甲斐となく信吉さして引や志の縄

是ハ原田吉ひとき堀九郎のと称しるも仍に却りみしとて後原田は時乃
不足とあるや批たなき傷しと遂に戦死しり。

一 尼子勝久播磨上月の城を攻めんと毛利家が是を攻るも依り信長公援浩
としてお紫菰守秀吉と大將とて下さるるが秀吉今度中国勢と初ての
戦ひをい、一志は付はしり思ひに新補などとせしるるが上陣の系京都と
連秀の鳥のけり發句を聖護院の宮

常盤木とめつをんるる若きあふ

夕かけ 涼き 夏山の 雲

村雨の音し おとさめ 月出

千後秀吉上原好諸ありも是れ備前へ退きぬるも依り城邊は秀吉勝久ハ自害
しと爰せらるるは時乃尼子勝久とて亡し果て山中虎之脚と名とて
忠義の士とて讃めしるるが山中を流し毛利家の名を誅せらるる

一 荒木村重も毛利家の志とて進しうらん山上陣と解て秀吉と毛

と書て舎りとき、西川は仍き指の血一とていふるなり

早川沈む水層と浮く水層と河法の舟よりあそぶらん

と書く乳母よどくばもたまふと最細て水中に身を没する例しかり事也

一 寛政久保東三佐入道と改いせしるす。三位殿貞とて今き戸之部の所

と書、あて天正五年十二月廿八日大友宗麟と改て豊後と改らるる宗麟

則田原紹忠とて初より今き三位入道と助力をうけし河原者讀ん

今きとて、前とありて三位殿田原とてのとて這よりり

三位殿とて田原とて、奇案者をも我るく偶居ある事と云ふと思ひ

かくいふと悲憤の心を記し、あつて豊後の國とお都より河原幸吉とて

一 毛利と南條元續と佐別とて合戦の時

此元統の親父宗勝を安藝の武田家の侍なりし、後元親と改ていふるは、宗勝の

毛利家の身より南條肥前守の子とて元統のとき、三平のとき、おねなるあざとい

ごとあの童といふてける、働とていふ、只、おねなる童といふてける

さて人より不信、おねとていふ、今日も、然とて、又、離れ佐田小流とて、

一 一、おね、いふ、南條が郎等、一條新吉とて、云者と討て、首とて、佐田

とて、見らる、とて、いふ、小流、おね、感持、おね、吾、十三、年、今、十、五、年、

おね、分捕、おね、人、又、不信、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

疑、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

不、民、部、入、江、大、藏、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

入、江、大、藏、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

佐田、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、おね、

そいふと聞るれと盛重元春吉川の事も仍て仕へぬ
一 戸次道雲と秋月種實と合戦の時秋月が郎等井田等親氏とあるは是年
の春者衆小勝をく奪^奪殺しけるは十時松澤寺と名をておるを馬上をさへ
組両馬がるは動^動とあるは親氏十時と郎等押へ肩と搦んとするは十時
郎等馳と来て親氏と二刀刺せし十時押返しとあるはさへさへし
親氏と又井田郎等親之と我子討せしとありて此は堀への親氏と
葬りし事なりと

惟^唯この事と道雲は迷ひぬ後世思へる山の隅の月
と確て伝^傳の在りし如く不月と合戦の首^首なるは是時と追て討死せり五
倫^倫は愛情と不方とありし事と悲しき事なりし王彪^{王彪}と
憤^憤の憶^憶退之と西月在吾眼^{マナコ}の憶古今相同^{ヨドク}ある理りなきは親之心の
内^内いう計りぬとある人々人痛心の涙は袂^{フセホ}と泣きぬとあり
一 吉川式部少輔経家身取の事と自害の時とあるは秀吉へ送る状

よいとく

今度^ア因^ア別^ア島^ア取^ア京^ア勢^ア弓^ア矢^ア之^ア備^ア極^ア勢^ア引^ア受^ア代^ア認^ア辛^ア遂^ア自^ア
殺^アし事^ア了^ア爲^ア後^ア代^ア之^ア名^ア義^ア此^ア旨^ア趣^ア於^ア天^ア下^ア門^ア披^ア露^ア不^ア希^ア
此^ア忍^ア悔^ア謹^ア言^ア

十月廿四日

羽柴秀吉様

吉川式部少輔 経家

今後秀吉が横使とて堀尾一柳おありは色は式部少輔さへ自害
はぐとて一人五寸の折刀おて中巻しは亮介と名をて日比純名とて
事^ア了^アとあるはおし仕損じぬとあるは堀尾は秀吉の事なりと
さへは秀吉は是れは人のを殺しは合人として辞世の事なり
式夫の太鼓なる様なりとあるは太鼓の事なり
とあるは下は腹十文ある様切て両手と突て首さへは能くおてと
なりは静間源次郎と切りたるさへは相傳の事なりは目暗し

てかゝりしやうり色ハ經家^{チヤト}の討些と頼る意色をばくする麻者ぎれざる
日とちり色ハ二のちがもそ潮く首と折断しけり頼る意とそ赤吉の卒陳へ
送りけりよ赤吉と意色し或士或と建の被と頼らるる

赤吉島取の被と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
はく和服の被と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
城を陥る意色し或士或と建の被と頼らるる
和吉の事一應端して
大將の事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
又赤吉の事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
又赤吉の事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる

一天正七年荒木村重が楠宮より上杉列在園の城と城田勢重くは取圍て攻
めは既^レ此城抱^レ難く村重城と成るる流石武勇極まりし人な色ハ敵の雲
南より並^レる陣屋の事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
の意威の陣屋五枚虎の意の以^レ捕るると猪首は忘^レ三尺三寸のたよりをす五枚
此^レ遠矢の事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
此^レ遠矢の事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
此^レ遠矢の事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる

夢へる又諸陣の形勢と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
とあり又或^レ此^レ屋^レハ人生ハ輕塵^{スミカ}樓^{スミカ}弱草^{スミカ}泥^{スミカ}や敵^{スミカ}とや一時の後と
さへあらぬ事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
世の事と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
武^{スミカ}村重と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
武^{スミカ}村重と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
武^{スミカ}村重と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
武^{スミカ}村重と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる

一天正七年四月十七日播磨三木城主別所小三郎長治^{ナガシ}城の諸士の命と教ふる
とありとそ身^{スミカ}自害^{スミカ}しと頼る意色し或士或と建の被と頼らるる

諸人の命と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
二十二年^{イニ}長治^{ナガシ}
二十二年^{イニ}長治^{ナガシ}
二十二年^{イニ}長治^{ナガシ}

命と頼る意色し或士或と建の被と頼らるる
二十二年^{イニ}長治^{ナガシ}
二十二年^{イニ}長治^{ナガシ}
二十二年^{イニ}長治^{ナガシ}

長治室

諸君は清果なる心を持てられ後世を為すの功ありあるべき

友之室

形もどき同じ蓮の花のうと消めふ 意のいさのありあり

長治叔父吉親 室

元おの山道と逢うじ思ひを我身よりくすし末の室

長治家へ 治忠

君よりくすし身命の命よりくすし身命の命よりくすし

一 備中國高松の城とて水多きすきしとて田はは増え築き河水をせきいせ
敷日攻めせし城の中よりと弱き家もなく流るの末吉と改めしんども
くさき入城せし者報きて流るるべくえ方れど城主清水長治の宗
治諸士の命を代り自害し和睦せしは秀吉の傳へ中せしと色バ即け
件名有るは依り宗治の舎兄月清入道とつづぐ
故、有て清水の家
末近は家の

若し衆人難服傳承に下し入宗治の供して自害をへしとて小船は棹刺
城とあり敵陣中よりくさきありとて弘治の舟は意地の風を受て死
の此、若しとて端羅の廳は意地くさきとて意地の船は秀吉の
本陣直くぬりしをば宗治すとて一禮しつて最期の一曲奏ん
万と揺りて死せしといはれけり。川舟とては宗治の流る
清水の舟とて入るはしの意地の舟とて意地の舟とて
文字は松切り入道月清とて意地の舟とて意地の舟とて
の舟の中は心止るる意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて
末近は家の意地とて意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて
いづれにたしつるは意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて
かきとてくすし舟とて意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて
船の意地とて意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて
あるは意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて意地の舟とて

仍きつくゑるをいひし弘誓の舟に迎や来ると約するをど舟教ども見
つたなりとて迷ひ行く船は六道は輪廻して今火天物とぬける唯心の淨土
己身の弥陀とて十萬億土の者をきこふと尋し成佛の道の有るをいふ
捷徑なり示しとて不作して迂回する十萬億土と云ひけるは徒なる事
訛るは多とせし事とて又教の抑止する謗法の人の成仏せんと説
はくども弥陀の接取は五逆十惡の人なりた接取不捨の力は依り
成佛あると教へ給ふべき借使夜盜海賊と云うた一は弥陀佛即
滅亡量罪も色は死せし下は弥陀の接取は成仏せんといひは益
の得とてせしはハ常なる事と唱へ給ふは世々一定成佛とこそい
しは生家の自業自果と成るは娑婆の呵責とある若し何計ぞや
此は世間の邪説は依り作し惡業なきを乞ふ來世を罪科はなしは
魔の廳は至りて我が科ことわりては率作あるは誤りせんといや
此坊のまげや長老とて引くのんといふ長老大は是を教へは生家の重科

は依りける事とありける我の世の爲は一七日晝經と云ふなりと忽ち
成仏疑ひありとていふよく思ひをいふと云へば水落いやくと云ふ依りて
佛は此上の事と今ハ弥陀とて金銀の少しは金とてせざるやされハ
こそ世間の如き事と有る知識長老の人を教ふる行はハ金銀と欲するは
るゝ娑婆王と賄賂の爲はハ娑婆王の流の面と暗し業の權衡
の收束と云ふとて世間の俗と輕蔑と事と云ふ如く世間の俗人
人を欺し取賄へける金銀と賜ふとて小鬼等は頗るつゝ罪を輕
べし是ハ金銀惜くも世間の俗と輕蔑と事と云ふ如く世間の俗人
老肝魂と身は赤く移るを富へける金銀多く取方して云へるは
は水落いやくと云ふは世間の俗と輕蔑と事と云ふ如く世間の俗人
消ス移るやと云ふは世間の俗と輕蔑と事と云ふ如く世間の俗人
は打殺しと云ふは世間の俗と輕蔑と事と云ふ如く世間の俗人
日傭なりと云ふは世間の俗と輕蔑と事と云ふ如く世間の俗人

一 天正十四年七月六日、島津勢筑紫、曉門を襲う。一、瀨の邑城へ取かけ
 攻り、色は曉門いづ、最期の一戦せん。と大立ち振る。切てお猛威と震ふ。今
 薩摩、惣に河上、お系、曉門を潰し、全せ。功経びる。いふに、思ひん、一、首の身
 とぞ、かけらうら。

抄紙ふたりの下こそ産屋な色シグマ唯切の色ささハ極紫
 曙のつて面ふーと云詞の下よ

切キレバききヤイハぬののるねとらし本来心よどちなのち後ぞ
と足高くと暫しが程歎ひるるが遂に晴門討色ゆる

一 中紙言隆系卿を備後の三原の城と荒襲の地とて佳道とてありしよし
南海の風雲ふん識と清うとて江鷗ワウと閑友とし芦鴈と水伴とて安靜
のるまふ月と送るまふを以林吉無庸入道梅林京都より下向とて三原の城（京）
より黄門對面一泊ひといふは梅林荒洛は何の城を事々ある我道より上洛

せきぎは都の端と國の海とをさへて定むるは梅林の海なるもの
 づきより黄門今以何の流に同らざる龍達が小歌の中。面々の事ぬ
 や花の都ぬ後みこと中歌とこそ留女俗俗八の老翁三歳の孩思をぞ
 こと夢のうた謡ひやゆとかりをば黄門改まされ面々きあてさへ海一曲
 うさひと定むる梅林ハ吾老翁く思ふなり調ひん事あうしれと
 思ひをきん嚴命をば不及カ歌うてや謡ひく今三十と四十と若
 くゆぐ声と少しハ震しく節情士とつて色あけゆんものも腹は平は
 余りゆべい子聞人の身は死なんと死なぬ老翁と恨めしき物か
 高歌一曲掩明鏡昨日、昔年今、白頭とそ今翁が身の上は知れ
 ていよりあれど黄門いやと面々き今一ト辱し謡ひくと定むるは梅
 林何の老入道が声哉息継ぎのうた調ひん面々きと逢ふ心の事
 面々きよりそ時黄門何のよしある面々きと云はれぬ。面々の事ぬ
 や花のうさへ梅林と云ふ所の情事の面々きとや海海とて懸えん

世に謡ひて「ワセヤバシ」のうたを著しよしとせといふは、實は和歌のことも万葉の
ものなり。偏ぢる事と有べき。而も儒學や武備のことも後より色
而も武道や文事と云れぬ程をいへり。この言もや。而も和歌や
あり。その本の陽の道と身と後め程まけとも證すまほしきといふは、若
事と中り二つある程。暗くするもの也。諸道の説。唯は唱聲の一音
以て蓋之。是より一輝元卿、よくきかせや。老臣奉行等もと此等の
心と合得せよと云べし。うたを著しむ。
この等の作者竜達といふ者ハ元年
曾洞の傍にとり
一大友義慈ハ文武の両道を達し于戈の時ハ愛鴻の道と云ふ者とあせらるるが
或時わの方へ

なびくふよちうておくの、
 女而先思ふをうり。風を吹とも
 とよみて送り流ひをば北の方

あびるべしちをわくの
 糸花 ツモリ 多色より凡そを

いづきそくへん 主上此奇と叙感有て 雪中、小苗 螢火、灰と云

難歌と無量後より名をさし
ふけぶしと余ぞらしめ

聖中子苗

冒士 移る田子の浦端の黒人 急ぎの舟を 乗るた

營火灰

取束も人當のぢも踏て池のまこま
 這わう ちう
 まうとま上う 都を賜ふある心と

思ひきくや 菰葉の海の果迄と
 和歌の浦波かゝるへきとと

一 大友家の持城主記と政略きんそ 吉川元長小早川隆景の戦ふ跡を
政國の城代藤原朝助田北氏忠実宛の書士なせハル右なく是
がごとくして唯飯と寄つて日ごと送りける去程に秋晴方なほ佐佐木信
兼或時の怒りし或時を報復せよといひなりて奥と信濃の時に
或時城守が青雨をさそ物具とと饅頭^{カビ}ゆくと書く一首の相寄りと
矢ふとよこめと送る

あ月々の花多きの城攻とくさる燈の 神の香ぞう。

中國の傳中より一

命思ふ人なき倉の木の雨と涙と添ゆる山城の内
そ後遂にき城の中一階とぞうらうら

一筑後杵川の城主蒲地^{カバチ}彈正少弐頼盛並き就造寺澄信の爲に謀をらるる法
並の姉妹と徳とやうが肥前の有馬は着て思ひ居うらうら筑後方の御
者くと仰て領主有馬修理重文義純入道仙岩の方へも公も出うらうら
よとあらぬ月日とも更への秋を来て七夕あるはよりぬ城の中の侍女
等一羽ひの糸とわけ振くの衣巻と降りたきも就田の紅葉芳野の花
を散るく二羽井あ山吹四季の詠と一月も浮れて宛と仙境浮世界
への如し彼徳の方と只獨り打ち居るる糸多きを信やまの女房
何とそ衣とそを泣きぬと云徳の涙と云

いづくらば何とぞ備ん士は子泪の介き身はそいづこそ

一肥後の玉一擧の幾重 限^{カバ}親永が嫡子親安は城攻軍の勢と集の程と因
中と乱さん今が浅野が國有く謀とて隠れよと然と本願お違何じ
とくばりあるを唐吉公の見事よ入ると親安と娘とて宗徳の御等
ハナ飯人なりことくくおとけりお又柳川は親^{カバ}をれし者凡ハおまの
世の以誅とべきは信とけきと剛士十二人と討もよ定の宗茂ハ二たの
橋に在て限^{カバ}は對顔とべきはとやをしる限^{カバ}と怪く思ひなめ十人
一不^{カバ}威威と別^{カバ}の登城は々々親永は隠身せし者の中は限^{カバ}筑後
入道長良と者なり限^{カバ}は新田義貞の末葉に能く入とぞ新田右馬^{カバ} 留美
照と云うそ子大友義隆は候とてを江戸とぞうらうら長良そそ米
也傳とよりしうあ思ひん還俗して限^{カバ}が跡をとり限^{カバ}筑後入道
長良とぞ名をとりそをんとぞ新田掃部^{カバ}と友豊府府志の後宗
茂は從ひあう長良は獨別強よとすくの戦功の譽なりりるこ
宗茂傳と知くなら思ひ限^{カバ}討るそあねえ兄掃部と家よ長良

方よしし限形は明日死せらるべきは極りぬ何ぞ一揆悪黨よりて命と失
 のんや志と変し事は死に足意有るを便と誤るや良辰と流し
 親永が死の直き事一筆て知るべきは悲し我命惜しんば何ぞ是迄延び来
 らん親永死後と申し時とて逃るべき身ありぬ本國をといふ事な
 色めし再三諫めしを聞ひぬと唯今見苦む死とすべしや是と
 宿縁の業ありし限形が威勢のそざる時け多と申しを改は依る命と
 助る事と何ん今危きは歸て志と変せんや不詮某が死と急ぐもの
 とて已は自害せんとすると掃部押してあてに良辰分の自殺と云ふ
 るを親永の方よしと怪み河をたがはるに迎て死すべき身あり
 ぬ宗茂の然志とも報じ明日親永と一所は死せよといふを良辰
 て嗚呼と云ふ宗茂の今の一言ハ我為よ不義と勧めらるゝといふ
 亦恩なりきものと悲びと自害と止て申る宗茂への報恩は親永に
 今き過ぎぬ身なりと云ふ事と云ふに知りまじ我亦討ちの者なりといふ

太刀と打つて此上の所方志は親永と其の者夫と云下は搦捕て首と削ら
 る事等如く申され候とて其後ハ多々物とも云ふ事有り揚部此世と宗茂
 は古きより宗茂を親と号す殊彼と痛み推是し十時搦捕等と候とて
 自ラ書牒と認の道に申しけるは昔良對面とせば十時と力及ぶに立向り
 士と云ふと申せども宗茂と名は社有べし何とて士とて怖る事有る昔良
 其甚夜親永が弟は出く浮世の精養と云ふ所をかく所申自害とも
 せよと諫めける親永思ひあふ事有りしを以怖る色却てを申も明はて
 其月廿七日の己の別計は親永一族十餘人群はあき事有りる昔良其白
 緋の單へ物すき布きて沖巻とし四人三寸の大刀と佩きあえりて立
 たりける腹は腹中三の曲揚を事有りる時宗茂其の討手の侍十二人出向ふ宗
 茂と娘とて諸人其等の前を色どり候と候とて其後角に十二人の者雜人
 一人と連人立の事と上意あり其今討果はとて詞をあげ振振とて切せり
 親永が有りる有勤が一族何きと云ふと申し事止むれハと云ふと強がふ

はふきしは清正書にたゞだに教傳す所ハ胸をたさなく述て傳のよ死にんと
かみ後けはさきハ遺言狀何の志のつべきと著へしは正則 詞多り

一 大明將蔚山を攻一時毛利の家臣冷泉氏於浦元満元と云ふ預死に其信
伴賢治中勢並治堅おるを中へて死にたり——この中へて大よおみ
が於て腹切てこそうれより見はさる事とて死にせしは長つのお
まゐる伴賢治がまゐりうかきまの自害——と云ふも——信を
死おの由とておてておく物にせし君と云ふと道の極なり

と傳へし守り刀と云ふに忠とあき心と云ふ実とてうけおしはなりと云
はうり二丈と云ふ更なる例——おき世なりは是を金とて、係^{カケ}とて二世
のちざうと云ふはびるこゝと云ふも中へ心細くあり記せん
と云ふは年々と云ふべ——

一 長きころと云ふはこれと云ふは死にことばなり死にものこそ武士などハ武當
と云ふとして民族お傳あるなりは信と云ふは信濃川のほとり信濃谷が

一の谷のえをのむ人の事——お傳ある人あきと云ふれとて死に
感ある事おのつひのちとてと云ふは——と云ふはと云ふは
うまうそそのむのころおひやる色これと云ふは武士の心
と云ふはのさるものはお傳あるに信と云ふはと云ふは人
本態各われとも異れとも何れお傳——武士と云ふは今の人
は色バと云ふはあきと云ふはあきらんと云ふはあきらんと云ふは
武當と云ふは甲斐の事と云ふはこれお傳あると云ふはと云ふは
——おへきなりと云ふは間の上——と云ふは死にける人なることと云ふ
者多しこれのくのことし——公明傳と云ふは文王を我師なり周公と云ふ
はと云ふといふんといふ

一 南都東大寺の黃熟番と云ふは吳名と蘭斎待と云ふは密院
や一の室室なり抑この室をむかし聖武天皇は河内大寺より
事なりと三国安ぬのあきと云ふは本代といふてあきの住物

はよぎさるう——りんごを名に別名を蘭者待しき名つけとまう
件^{タテ}の三文字の中は東大寺の文字にせざるべしこれよりして代
の公名とてせむこれをもとせむ——信長公このこと内々所^所知^知
あつてこの香^香和^和をなせとせよ——養^養圃^圃と雖^雖も色^色をばまふち
勅^勅許^許して東大寺の宝^宝蔵^蔵とせむ色^色四^四例^例はあつて一寸八分と
まう——あつて分^分と八^八分^分とせむこれ別^別古^古法^法とせむこの香^香を東
山の慈^慈照^照院^院と政^政公^公所^所知^知のち勅^勅許^許のちあつて——この
とび信^信長^長公^公より連^連子^子勅^勅許^許有^有——その所^所に親^親接^接のことなり

天^天竜^竜寺^寺は如^如智^智院^院兼^兼秀^秀和^和尚^尚と碩^碩多^多方^方の住^住持^持ありこころは大明^{大明}再^再渡^渡
和^和漢^漢兩^兩朝^朝の連^連人^人なりよし世^世にこのつとめありと色^色ハ信^信長^長公^公より安^安土^土山
の記^記と所^所知^知ありとせむこれとせむと色^色ハ信^信長^長公^公より安^安土^土山
南^南化^化和^和尚^尚より傳^傳承^承する人^人この傳^傳承^承せむと色^色ハ信^信長^長公^公より安^安土^土山
と色^色——かむとせむと色^色ハ信^信長^長公^公より安^安土^土山

色^色あり——くせむ人^人——とせむは辭^辭——ありと色^色——かむと色^色ハ信^信長^長公^公より安^安土^土山
と色^色ハ信^信長^長公^公より安^安土^土山

古^古曰^曰太^太山^山之^之前^前難^難爲^爲山^山太^太海^海之^之前^前難^難爲^爲水^水日^日域^域六十
六^六列^列之^之一^一列^列曰^曰江^江江^江在^在有^有山^山名^名曰^曰安^安土^土其^其山^山不^不
在^在高^高其^其名^名高^高太^太山^山也^也蓋^蓋夫^夫非^非山^山之^之獨^獨得^得名^名有^有寬^寬仁
大^大度^度人^人居^居焉^焉也^也劉^劉夢^夢得^得不^不豈^豈曰^曰字^字山^山不^不在^在高^高有^有仙
則^則名^名水^水不^不在^在深^深有^有竜^竜則^則靈^靈夢^夢得^得之^之一^一言^言可^可井^井接^接
焉^焉層^層巒^巒之^之崎^崎峴^峴字^字上^上者^者自^自然^然金^金城^城也^也滄^滄波^波之^之
澌^澌波^波之^之澌^澌字^字下^下者^者自^自然^然湯^湯池^池也^也自^自天^天地^地開^開以^以往^往雖^雖有^有
此^此山^山人^人無^無識^識者^者矣^矣葛^葛原^原帝^帝主^主的^的々^々令^令孫^孫平^平清^清盛^盛世^世
一^一代^代之^之華^華冒^冒前^前右^右府^府君^君者^者林^林示^示庭^庭綱^綱紀^紀武^武門^門棟^棟樑^樑而^而實^實
天^天縱^縱聖^聖武^武也^也先^先是^是天^天正^正四^四年^年之^之春^春一^一見^見此^此山^山便^便識^識

萬古城地開闢洪基摧輿于此矣力士是馳揚石巧匠霧
列運斤則不終三年而其功大成矣潛慮夫數百丈之石
壁千萬間之大廈何翅力士之力巧匠之巧乎唯流出
府君之一胸襟而已目機之所明意匠之所巧離婁
之明公輸子之巧不可跂而及者也峻宇高堂之凌
碧虛者也極夜摩都吏之壯麗兮直欄橫檻之聳
翠崖者也盡秦樓魏閣之華美兮布地礪礪者兼
露內潤葺屋瓦甍者帶霜外光西湖月之上玉塔
者供府君之夜遊也南浦雲之飛畫棟者催府君
之朝吟也颯々松風之動金鈴聲呼萬歲山耶紛
紛白雪之映珠簾影含千秋窓耶權門貴戶之
圍山城也遠水鱗萃也盡是無不丹漆黝聖寶
塔之突兀出林間者疑綰遠寺釣艇之ノハ浮蘆

邊者怪圖師恍滿湘千里風景嘉陵三百里山水不可同
日語焉英雄豪傑之擁繡鞞出入于相府貴介公子
之翻錦袖往還于官途爭紅花紅葉色也億兆民
之富驕者鐘鳴鼎食之家也見者反目駭汗聞者
拍手賞嘆矣江南白鷗懷惠占閑江南梅花被化
舍咲信及脰魚咸知草木當此時市人歌于市野
老行于野行者遜路耕者遜畔雖荒僻民文武民
不可讓焉加旃起王道之衰修神社佛閣之破續
斷橋平嶮路是故四夷獻貢來復焉八蠻解辯
服膺焉或臂後鷹乞臣守其幕下或上良馬
請將守其麾下所策勲傳矣鳳凰現瑞麒麟
呈祥者非今時何時乎祝望々々向所謂大山
之前難爲山天下人亦將曰安土山之前難爲

山野^ノ衲^ノ雖^ニ達^ニ衛^ノ業^ノ列^ノ標^ノ散^ノ陋^ノ姿^ノ管^ノ見^ノ此^ノ名山^ノ豈^ニ
無^ニ感^ノ慨^ノ乎^ノ卒^ニ綴^ニ身^ノ詞^ノ者^ノ八^ノ韵^ノ述^ニ盛^ノ譽^ノ之^ノ萬^ノ九^ノ

伏乞 咲覽

六十扶桑第一山
宮高大似阿房殿
若不唐虞治天下
蓬萊三萬里仙境

先松積翠白雲閑
城嶼固於函谷關
必應梵釋出人間
留與寬仁永保顏

岐下沙門玄興并稿

とを事とて言ふは毫子毫力ありて言ひ過るなり言ひ過るなり
絶する計り之去ハ今に至る其心一統者也事と忘れさば此即衆
意を心して思ふも南化和尚の黄金百兩小袖三重将野又九節
鳥印便服被慰を常功又策彦和尚の謙徳甚しき威有りし金

子百兩此子百兩小袖三重二任法中乃御供仕恩賜なり謙徳却て
光りとも妙なり事とて言ふは此人のあはれき何事と辭讓して已
不達達人ならざる事なり何事とて言ふは金銀玉帛といふ事を以て自
院の營々とも閣天竜寺破壊の如く補つる事との事なりと云
はつり謙徳と付きてしき威有りしあひなるなり

一 敬慕國よりいかに勝家安土より上りて信長公御食意有てその後茶
ふづりうきさせ給ひて賜りたりと云はば業を承事の上の事と骨髄は徹し
ても是なるる有て上なる事敬慕の如く西國の威光は必く輝耀は治め
中々全く忠臣とて上級を奉りて天下の如く天下の如く忠臣と勵
中へさるるも是へういふは是の如くははささきと云ふ言の上の事なり
金下一賜りなり是後の思ひは是より上りて是と云ふよく望み中
を是と信長とて御供仕時大なる忠と云ふ事なり杯は飲み何
と云ふ身より上る所計の事なりと云ふ事なり思ふは是より上り賜ふ

多事相の意これ有司の若るべし其の意をいふ人とは同提心と
傳へりつてきけ信用ある時こそ必ずしも信する事なし是も法は非なり
おとと智得なる事なりしう伸ては玉綱のふーやんふとのを
車寤寐のユ業そしめざるゝ必ずしも是なるをし是非玉綱字周
公の力をいふ可き専用ユを傳へたるはけりしは此の世力光と云ふ
此信人多くとも其を有別者進退直は合ひ小功は心と云ふべし邪惡
の罪を伐し温厚に君をみ唯大功を天下に及ぼし及ばざる
と云ふ實なるを天神威と云ふし人心自ぬふ法は如斯くまん一教功
くそ威光いと云ふびやなり是又勝るなり非なり夫審右帝爲指す
天下國家成久なるの秘なりへしと云ふは言ひいふこと近き事なるの倚
るよりいふし是は説法し謂他法は樹自法はもと我教なりしと云
人の力を意りあるなり法知之可用之

一 戦前の國より一向宗一様と企む時城の都が陳代通の事と云ふ者本は目

の城と明のさるる城あり月通又後難とや云ふんを身を城の方と
なり其のさるるは列甲智の列のさるる本下は吉野赤松の城と云ふ
少あり通と云ふは色ハ略列はるるを捕捕をぬく通はそふ
至る近き事なりけり是より通は言はるる其の連なりけり是傳世の事
なりしうなり

身を歴の露惜うぬ命なり

同く喜めと云ふ傳へるは是なりと云ふなり

あひ思ひふさぐ野乃法のさるる心持しき月けりなり

と傳へるなり

一 淨土宗靈聖と云ふ傳國あるなり安土の町まで流るると云ふ諸人邪
集しは法を日蓮宗達部紹智大僧傳はるる法法の法はあふ靈聖
強く中山靈聖の事なりは各あふ靈聖と聞中しき人佛法の事なり
と云ふ簡なりと云ふは法宗の法なりと云ふなりと云ふなり

中へ一と云張す七日の法燈と十一日と延門也一の法花をへ後と立付けしを
 送る法花の僧侶と宗瑞よりあるしとて京都頂妙寺の日光寺光院九音
 院妙顯寺の天冠坊塚の法燈寺坊主諸宗部邊の不傳など云者人を迎へ
 ても也等信長公は事少くも何年隱便の法燈をへさの世とひくは信長
 ぬちの耐矢那を城をたてし長谷川竹子と作月多くゆれ咤有之と淨土
 宗を河原より上意と灌以中へさし信長信長は天部系の法花の事も勝り
 今て同心中さび一向の宗瑞仕方中暮る此上を是非は不及宗瑞仕方
 よと作付らるる時判者とすは作付事都より少味有るる南禪寺の
 秀長老親よりさの建丑山を撰と出ん又さし八宗兼学の有發の傍に因果
 居士と云者折哉安土は所よりある哉是と判者より法燈法圓の次月
 書付とひくは後より御入さの世作せ付らるる故より此曉の事と時と天正
 七年五月廿七日安土淨土宗の寺海嚴院佛殿に於て宗論に法花宗を
 影一く法燈はあまふとあるにゆゑの日光寺光院九音院塚の法燈寺坊主

妙重寺不傳寫生經以妙嚴寺の大藏坊筆執して法苑八軸を硯折紙に持
此の如く抄写したるを華東の靈巖長老は安田中より有之貞安長老
唯二人出度人なりと云ふ。又その如き経の解を靈巖長老が宗起某が不為とい
ふと雖も圓白と云ふところあるは貞安と云ふ通じ知れり初則と云ふそ
こより宗陽の如く畢ぬ貞安同く云く法苑八軸の中は念佛ありや法苑の
云く念佛有之貞安の曰念佛の微ある何ぞ云仏坐する處ると云く法
苑の曰法苑の弥陀と浄土の弥陀と一解、別解、自要の云く弥陀は何し
下有有と一解、法苑の曰おほ何ぞ浄土門は法苑の弥陀と捨同闕也
^{フツ}佛の印と捨同闕也と云く法苑の曰お佛と修する機の前は法苑と捨よ
云經文有りや否や自要の曰法苑と捨よと證文に於てあ色淨土經に曰
善立方便顯示三乘又曰一向專念云量時覺悟と云く法苑の云く法量
或經に曰種種說法以方便早餘年未顯志實と云く自要の云四十

能事の法門と云く示節と捨る方注有田の妙の一字は捨るを捨るは法
苑の云々四十年四妙の内なき何色の妙ぞや貞安の曰法苑の妙は法苑と
不知や法苑の信徒此意を不取即ち以て凡は貞安又曰捨る不捨る
と廟と云く敵と云く此の如く法言也此の時判者と云く満月一圓は曇と笑て
法華宗れ衆沙衆と判取る于時十月十七日辰刻に雲雲宗と廟と云く
多し一宗まひるは國師寺日光寺妙の一字はつる打擲せしを
八幡の經王と見物の者大なるはもと放てし法華の氣也方へて近き
はく法く近きもの者と遣し悉く押留は叔宗論勝負の書付上
後す備へらるるはもと法華宗を悉く沙叱りと云くかの大服傳はもと死罪
は作自ある

一 戦氣の明倉は竜海宮千代と云者あり今年いまだ十六歳なりけるが父は
去る津葉の城の先師と討死する宮千代幼かりしに父と一和は

討死せざる事次はもと思ひ今夜の敷地山合戦はもと能く敵と組くる者
あるは戦いどんと討死して又同じ地は敵と曝るんと云く入るは
あるは未だ若年なりしに極端に押隔らるは母の合戦はもと若と云く
おじし此解あり何事なく故郷は敵を殺しはるは諸人は後指と云
るはし然れどもやうりてはもと自來あるはもとやうりてはもと自來ある
はもと定の事又て後あるはもと親類知るの方の書林書一と云くはもと
はもとと云くおし

ふとあるはもと勝は逆はなまてと云くし元おの山田と云くはもと
と云くはもと勝は逆はなまてと云くし元おの山田と云くはもと
ふとあるはもと勝は逆はなまてと云くし元おの山田と云くはもと

一 弘治九年八月上旬大覺寺殿義俊東郷は戦ふは所下向なりは法倉
と云くはもと勝は逆はなまてと云くし元おの山田と云くはもと
あるはもと勝は逆はなまてと云くし元おの山田と云くはもと

昭坂尾より曲水の遊宴ありて人々大賞す
詩新と仰せらる

早涼至

美系 別舎

花流の首と海と山水の一とをささる

女帝

秀遠 四寸大細

初下似字

聖懌 傳

新雁成行 字々連

秋風夢里夕陽辺

旅鞦韆映芙蓉錦

恰似同一文詩一篇

山月

系紀 別舎

月こころに花さき影とていふもや

林より漸黄

月鑑 傳

夢に涼き秋樹陰

停車留馬不堪听

曉来露若為霜去

鴉外 夕陽紅滿林

花ふ帯霜

雅教 花ふ并中細

露時ぬれしとていふもや

菊

茂俊 大光寺

流るる菊の葉よりとていふもや

菊延齡

知玉 傳

郡賢相集 宴江頭

曲水流 採ル 菊一浮

花作 莊周 大椿

一枝上 置ノ 八千秋

寄空玄

公遠 四寸中細

元々の何とていふもや

寄衣急

宗澄 傳

とていふもや

水江 傳

吉仍 柳野三帝

後方のえつる茅辺涼しき柳陰この川づゝは深ふ三書記
泊雨滴蓬

宗澄 傳

旅泊誰言思ひ方重
滴声喚醒 客船夢

蓬窓和雨一吟濃
何處寒山半夜鐘

寄鶴祝

雁珙 傳

白鶴声清聞九夫

遐齡正好祝平安全

十洲三嶋入君平

千歳仙禽在御前

一乘願金銀の更し住系係純の靈陽ありあけて南陽寺とてうき地
形出奇すと融境の感自解ふ其の境をある系極濃香芬々とて
閑敷の最中なりしめて永禄十一年三月下旬新公方家
格後をらるる一と南陽寺とてうき地の遊宴ありて人々和あけ
休むる

覚空 公方

備後守月と高年系極多の緒承さちきうとあり

菊廣 仁木信賢守

永き日影差つて人昔の春を春あけてあめをふれ春極の

明交 喰食

夕月半輪一をさへ系極花のしをいふを海とて

菊長 一色或助右衛門

人つとわめを係る系極いと暗夜を春の春の月

言成 佐々木西右守

極星極とてさる系いつくあのもりつる春の春の月

晴忠 大錦伊勢守

陽の光けつと夕の月の影いそ色を春の春の月

宮千代 佐藤宮千代丸

夕風の光けつと神の月かけとて春の極の春の月

信忠 上野隆興守

と達し入所ししころを所と爲る室町殿と号し叔公方ゆゑ其の公衆
十二人と服迎ふべくそを名称一記といふは非也。叔父武長の面より武清能河
畠山の三家やうく一義領を任し此は常陸赤松山名一色の四家はもと四職と爲
て天下の政事と稱ゆふまじき義領と云はる氏卿の内侍の執事職の事とて天下
の儲候大小名の支配人也四職と云ふ是れ目じ内侍侍所のためのもゝり也。此は諸士の
下知と爲りし治中の聲言と勤むけ内侍分松の面々儲家格役の事と十一段
は位階と定め公方と守護しなす天下と安んぜしころ也。此は亦も氏卿は五世の
孫重熙院が政公政通なりしころに赤松の無礼なり天下大に騷動し公方
重熙は其の衰微しなす程中後柏原氏に所守永正五年より菅原細川右京大夫
文政元年中ひきつて其の京都の公方義植公と退け故実政公の所舎賀
屋東垣殿の所を政知の所ひ曾喝食の所春日浴外天皇寺の香嚴院にま
ししころとあるは重熙なりて是を重熙公と仰きある法住虎殿也。こ
の後騷亂なりしころに法住院殿重熙と誤るよししころに所子三人ありき

まゝ一人ハ義順細川が素直に澄元は秋に是と場の討者義維と云々其子
 宗と所波の所不意とて四王の公方とて中より法住院殿今丁人の公達と播州
 の赤松は秋に澄元は秋と細川も赤松も其を公方と仰さるて後永享
 一備りも一是と義順は中より赤松院殿の所事也于斯細川の赤松所波の國
 の守護代は三好修理長安と云行なり其赤松有る武家天子は其子
 を飛と云ふ其内と傾りつて其赤松細川を以ては其子なり長安ハ將軍
 家の所相御座る理上て赤松も族子肩とて其中の政事と執りし
 其をば公方と改めしと數分詔對あり赤中家内あり合數なり
 及びり又長安は長子に永承寺より其と云若俗姓を山城の赤松の公
 民なりと云ふ二母あり仕へし其は立身して彼家の執事となり後ハ和
 別の子長とて多分の城に居候し又後ハ其の政道よりと入る樹更
 長安老後より其子に赤中家守長安也一ぬ平時長安より十河民部右
 一存子長安と云ふ赤中家守長安也一の是と云ふ其子と云ふ

一族三好日向身長縁日十郎守政康山成自統助左通付三人と後見は定め政道と
執事ハ一め是と三好家の三人元と号しうを外松永弾正少弼彼三人元と相並
て諸事の仕立を相計り抑も元々天文の末の京都の公方美晴公と阿波
の少所司美維と少所司ハ市島と阿波の内所ハ二好家の老成味方しし多
事し上洛有るを同六月廿八日公方を京都より召あり江川穴太と云山家内所
執事有る内武進の宗ゆき時政と仰う阿波の内所三好等と内全殿の内心
を有し少所司ハ少所の事をももてせしむ天文十九年穴太は放て内所執事
諸人追憶しきて頼て内所職と路陽東山慈照院へ送りし事をもり内所
内家督とお積有る時政の宣旨を奉りし事と美輝公と号ハ光源
院殿の内事と三好家と内所執事ハ内所職の爲の事ハ内所和隆有る
諸事ハ政道をも受て被任り相阿波の内所美維ハ美維ハ内所職と
由子美榮と又阿波の内所と号し内所は居住すくく永祿七年七月
廿四日三好美榮病死は今年冬の初より公方家室所の内所と内所造管有

進安山城守松永を殿助と号人ハ弘定作料の爲もとて松別上下の郡棟別役
と稱し是らる家一軒は金武家と号人ハ是を主と号人ハ責と号人ハ
弘後の大營謀役なれば美内田上の民家困窮と諸人公儀の政道と
恨らうとむは能はば是らる阿波の内所ハ三好家の三人義松永と少所
有る内上洛の内所ハ長安死後ハ三人元松永と心附しし事ハ内所職の
企り永祿八年五月十が清水訪と報告して人数を催し集ありし事
は三好日向身日上建守松永彈正少弼と名を稱し多勢二條の内
所武衛陣の少所司は押寄く一色をりし事ハ公方家ハ内所職の
中より進士美作守晴舎と号し討状と指書は是らる内所中ハ人数を
入るんと謀し相を討つる事ハ三好家の老成味方しし事ハ内所
一極は竹の事と号し一色は内所職の中ハ内所職の公方家の
候の武士なれは内所職の候は攻入りし内所職の公方家の武士なれは
はる美輝公を武家の大将とて内所職切て是らる内所職の人と一色は

光為
 行祐
 紹也
 宿深
 昌叱
 心氣
 兼如
 行澄
 行祐
 光為

一
明智の初細川幽林の臣也細川の家老なり田原左衛門と云ふと中忍なりしを光秀こ
らひ信長は仕へ遂に丹後一國 幸なること 西江の月十五石と願ひ明智はよめり
然る立身も全く田原が親也といふを以て後細川三將と稱し信長明智は原じ
て秀吉細川討ちの戦ひにこの原は明智軍路と所月あると云ふ事あり

丹羽公上洛人年六月二日也實多信長と弑せんが爲に是より蘇明智忠告あり
登り紹巴未と連ふると人々其時風と本能寺の堀を涉りて云紹巴未は勿
解りし事あると思ふ事やと云ふと能く

一 明智泉山の北に石子流る山と城郭と構ふ所と周山とを以て自分と周の親王と
比し信長と殿の父子と以て思へりといふ

一 光秀信長公と討ちあひ合ふ時、信井派との争ひ、使と馳て吾は一味有之ハ數
箇國を宛ねべしと云ふ、因此派と信井等と集りて、若し信長公の顧盼は固き
和列一玉の主となり、事一業已し、光秀が吹巻の不致おれど、渠が意を受る事
と決意し、是を以て惟ハ光秀は不祖、不祖則ち不親、不親則ち不親、不親則ち不親
と云ふ、八逆の罪を所遁と云ふ、此則ち不あるの理は逆例に而て心上の不親
不親と云ふと云ふ、一つの功に等と云ふ、各一理有りと思ふ、そのや、皆と云ふ
他、詭破と云ふ、是より、及、信井の所、在る中、西、北、南、と云ふ、十七年の、信井、派、側
に、関、する、人、は、以、て、明、は、理、非、歴、然、なる、事、次、と、云ふ、と、信、井、の、面、など、判、断、し、て、選、び

横山山部はあつる。是の長士人すは年止一軍さーとてくぐりける。骨極天晴
へ八ふ千の巻とせえへうる。寄るは向く。中なる八城中は八番く討逐して唯我入
跡のうらうら。打あふす種よ。てをを後代はあけく。とてくぐりける。あふみひの軍
よ。痛き働うる。今日と最期と出立する事。あはる。是に村まう。追ふ者多
あつうらう。蓋部市是とてくぐりける。と打あひて。後代の物語は一軍。てんを
ん。と多勝の中へ。をう入田。八方は追付く。虎の爪と打て。破けて死な
有武を接ふ。とて。中元。あき。と。と。一拂。五人十人打倒し
かれ死せる者三百人。ふ。びし。や。傷。は。血。付。者。は。なく。唯。を。矢。を。射。う。る
され。東。掩。矢。の。所。に。これ。を。蓋。部。市。群。は。城。へ。は。ま。り。自。う。首。の。目。を。居。し
立。あ。つ。う。跡。を。さ。つ。う。て。も。死。う。る。と。せ。え。八。番。を。接。あ。せ。う。あ。血。眼。と。ん。氣。配
を。計。の。所。は。さ。う。牙。と。あ。み。あ。ら。み。の。あ。つ。て。居。う。る。お。家。お。は。さ。う。う。く
有。敵。の。傷。は。何。れ。と。供。養。を。遊。ら。せ。う。る。は。三。海。の。後。返。と。い。う。く。と。そ。首。死。せ。ぶ
里。と。小。田。原。久。能。の。後。世。寺。の。稲。俣。僧。首。の。の。う。く。一。夜。を。禱。して。一。首。の
あ。と。を。さ。み。ド。う。

現とてまともと。ふ。ひ。と。移。り。海。世。の。際。と。明。原。の。と。定。
と。み。て。也。的。也。ら。き。し。め。を。は。首。忽。ち。ま。な。こ。と。あ。さ。ぎ。自。首。と。な。り。に。い。ふ。を。不。思
義。な。き。

一 北條氏後武列河野の城とて。今。向。有。り。色。は。上。杉。朝。定。と。せ。う。て。大。は。必。也。へ
さ。う。と。て。八。回。あ。つ。る。城。へ。を。着。け。う。る。城。主。難。波。田。原。田。原。と。い。ふ。一。人。引。入。し。ま。を。要
害。と。考。へ。く。と。然。之。と。守。衛。し。る。小。平。勝。義。と。上。杉。の。跡。を。慕。う。大。軍。と。争
し。と。相。ひ。つ。て。あ。せ。う。る。難。波。田。原。と。い。ふ。と。あ。さ。ぎ。自。首。と。な。り。に。い。ふ。を。不。思
義。な。き。一。つ。時。勝。ふ。と。敗。う。る。城。中。は。八。番。く。討。逐。し。て。唯。我。入
跡。の。う。ら。う。ら。い。ひ。唯。我。入。跡。の。う。ら。う。ら。い。ひ。難。波。田。原。と。い。ふ。と。あ。さ。ぎ。自。首
と。な。り。に。い。ふ。を。不。思。義。な。き。方。れ。士。大。將。山。中。主。祐。進。と。い。ふ。

あ。ー。や。じ。よ。あ。さ。ぎ。を。殺。う。は。あ。な。ど。難。波。田。の。う。ら。う。ら。い。ひ。
と。い。ふ。色。は。浮。き。ま。り。の。う。ら。う。ら。い。ひ。約。印。を。死。し。と。

敗走の因之^ニ歎きし家と弱敵とを物^{モノ}氏康の起る小児の格に似たり氏大軍
よて押^{オシ}え一人と世に代討敵と目せり凱旋せざる事無きなりといふも是は
確定し寛くとして控へたり氏康は此なる多摩歌和身とする者として部隊に入参
あつたの風程を寄^{ツキカ}り明かす初砲通過したるを以て次々天文十三年卯月廿日
寅子の月朔の山の隅へ立寄りたるは定安なり氏康を八千餘
との隊に分け一偏に控軍として多摩大嶺を頭ヶ敷所との初を居りてお
守り物と取ひ入り兵と三偏とを敵ととして一隊は先登は進み記入し馳せ振
度し至る二隊進み相争ひ切離し馳^ハるに先隊と二あり三隊然して
打合時件の先隊大逆し應て返し一回は強入り八方は閑と静けたりは若衆と
切腹公し敵の男は軍仕急ぐ事少なき敵の首は幾どの介討獲はさげ
味方のね平白き人假令敵と見ても自らは忘るゝ事討事あるべきが揚
貝^{ヤリ}より六郎と敵付切付する人彼と接して逃げ速きは一所は集まるべしと法
令考慮を下にし白紙と切り服着衣とし襦袢の上には是とを書け重子甲冑も襤

と停止しお廻と定め招明とありて持柳原は北の方西上移山内憲政の所和へ
扇谷頼定子別計り押寄せる敵の如く波郎とて所よりするをきき右佐佐木に
きける氏康を自身長刀と執り雙肩カイクを責う常とありしよりまゝに敵十
五人とテギヨリ短剣をもちて中々大將憲政ハ故人此人斗り勝てり討死するを後
は平井とありて敵らきける者殺す多き大膽亮が松原の備が揚屋とあり
惣人おと引寄る時に大膽氏康と徳めやうるハ敵と流るハ膝ワデと斬り金
を奪ひて幕末武士のしと大膽は油になりきる味方とありて腹を胃の
傷と痛むハ敵の志あり也明なハ某新とありて所先隊仕らん程ハ河内
の備のつらつらハ敵有へしと場吉のサ之也ハ旗本と徳ハ松原陣と張て夜と
明なり時なある銀成三十二巻
河内郡中味方の勝軍とありて銀成運とありハ付く
とも黄ハ勝の小旗と俯け勝とありとも三十ハ勝軍氏の陣所ハおとめる古河陣
一文とありて敵つらハ徳ハ長退とあり列と精と城とありて援と今和
所義兵ありと徳ハ老ハ三平ハ人としりねはるの夜軍は憲政の小首の估案

と云ふ事は少しも恐れず執倒を承て誠は和舟の徳は優く不祥と己身を受し
との如く一人身其の思ひをなす

一 是の八月氏廉律といふ者様はあつた小田原と申し武相の領内と巡見して御城
が千石の事自記にあらはる一巻あり

武野道々記

平氏廉

天文十一年仲秋の月武野道々見んと世に事月思ひある事ゆゑ人々あつた
おつた小田原將と申しとて略く將の御衆と申しとておつた小田原の御衆は
あつたといふ事と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
大田の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
るよし御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
おし野の月と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

そのみこし、おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

さておし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
井の底、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
そのみこし、おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と
おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

武野道々記、おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

おし野の月、小田原の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と申しとて御衆の御衆と

④くよ長井の辰よと名ぬ紙や若以あゝ辰よかゝる郎君とく入んと有と是ぬへし
 大川の辰よと名ぬ紙や若以あゝ辰よかゝる郎君とく入んと有と是ぬへし
 あきづ多く知れ辰よと名ぬ紙や若以あゝ辰よかゝる郎君とく入んと有と是ぬへし

坂角田川原不
 龍巻
 砂色と唯
 人々
 名のみ
 在
 京

白ひきあふ上総よのわたりよえへ渡せるこゝは葛城の石浄無寺の長老年八十
 余うよ及ぶる遠き空く青肉よ立寄り一宿有べき中よさきたれハ河を渡り
 かのもよむてあふりるよ夜よ入り風烈やうよ吹うり松風入琴と云事と云ひ出さ

松風の吹る歩ハ夜更を如くきこゆる音に如く

咽をえ弱をえの病んをえの道はふたつありつゝふたつありの破傷は日數のを
あつとふ八月中旬よりなりぬ小田原よりそつきよむ

一 天文十八年己酉四月甲午朔宣德宮臨幸高麗度綱時三幸の陳代芳賀正帝高麗雜色二
千五百金を奉り出師して順天帝高麗の衆人大半右海抗高麗と歎ふは宣德文方抄頁て
芳賀討るべし見へるべきに邪漢抗高麗と爲て王臣以て奉ると大言高麗是と判りて到

揚子江の舟と陸と拂て退散し北次堂のやまを腹し今日の歎ひ歎ひの首
とゆん事一瞬のち改まる指揮となして其後と打渡りしこと
事なきことと噓きりる後年北次は賢胤は多と大業は信らにこれハ言
雲をよみし拂ひつてたる秋風と松を細く月とるるや那

とる古きなり某軍死是也子細を最初なる此尚志（活字）と討捕一事及
家十分の差れうはゆる。あつ相列の氏康を、東輝一の猛将よりし隙有
たふと族より誅せんと欲言必と破するといふ及く色ともいふと野列へ働
さるる古来に郡官結城小山などて天合の歴々有る件の致は芳望と討
取らざる如富と威光（ライツ）ある氏康を討ち遂は八郎次重家の正敵となりぬ
滅亡（グロス）とわづらひへといふといふ勝と誇りとも苦み是ハ資胤とて一め
皆感心——なること。

一 国府、臺合戦の時大田資政入道三架を氏衆のいそよ向つてしるが所と勘り
わづら移芝居と云ふべからず。やは小栗衆の富士清水をぬきの子又右所^走より出て

[illegible]

或き個島と稱し以て惡候の類なるを流し一服さざりし又荒ま
るゝ大事の物となすを要するに似たりはれども足取ある色九候も退
治するものとちひ彼捕とけくそ、たぬ人時やとの所しき事といふ都
一唯捕を室室と申思ふを彼川洲ハ信虎公の代官お家の走りやるとし救
不の海と名ふる事なるといふがあらうよと肩つたりし上列この物と云
ふのを内蔵腹腹といて取てゆへだ。廣利支天の縁日未 精進といふしゆや
それハ誰よりひて付ると要するところだがんの大坊の内秘傳にもハ彼文
之月ありあらず。天文徳と目と取ると讀誦をときくればその事も誰が爲
こなし其するもの忠告也一人守し十人身之うと古語とありと少くいな彼
者至る及者ととも武道の事云給わくめ氏の臣におほうこの事を言を捨てむ
て成敗なりく天道のよきとつけ人罰と書り士卒に心と離るる勝利と矢
つくる車の輪の如くめし必城忠仕らばし又さきとともをさす事と上へつ
由淵も機をも知我のともしべ忠切と高くめし然ハ彼老一人をかし

主時代の者或き曲淵の彼に兵を動かす事と仕る曲淵と一かこの分とて歎切をむかひ
居る海を弱くする事の内なるし良直、無^レ齊^レ我^レ明君、無^レ弁士^レと古人とを
さう地志の古事分別とて此を以て其の地とて果て入るも此の諸人上下
是を以て何の道とて所奉とて言へしつゝ是を悟仕り、悉く感涙と流る程に
諸侍の心は切り申すなり

一 松山の戦役の時、永倉丹後守惣領子太左衛門、決死して敵と戦ふも、
て獲るの志とて、死するも、芦毛馬の書と水とを以て、天を以て、血とを以て、
如く、父丹後守を以て、武者を以て、此の如く、後、おぬき、助め、さき、
ありて、命、おし、さき、牛馬の書と返答とを、あきと、成道と、辨^カぎ、て、虎^カの、
とて、春、お、丹利、地、ありて、中、さ、い、源、を、武、さ、事、名、を、言、と、
中、お、式、の、源、の、も、て、即、難、お、れ、し、決、事、と、あ、き、ハ、又、信、玄、公、の、内、お、ま、立、
物、と、お、心、を、の、侍、を、何、れ、と、い、へ、武、士、と、今、と、金、う、ち、お、と、極、め、て、と、あり、て、
と、さ、さ、と、た、あ、耐、と、て、二、日、の、一、候、味、お、き、と、何、れ、あ、耐、の、も、
と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、

とて、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、
軍、中、九、軍、の、さ、き、父、備、前、は、お、ら、ぬ、名、を、言、の、人、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、
何、れ、丹、利、下、の、同、心、組、を、源、と、い、へ、武、士、と、今、と、金、う、ち、お、と、極、め、て、と、あり、て、
た、あ、耐、と、い、へ、武、士、と、今、と、金、う、ち、お、と、極、め、て、と、あり、て、

一 永禄十二年七月、品川の戦い、お、ら、ぬ、名、を、言、の、人、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、
信、見、源、を、言、の、人、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、

一 信玄公、今川殿へ送り、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、
然、り、所、看、經、所、の、い、は、れ、る、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、
一、ハ、源、氏、真、公、の、所、作、と、い、へ、武、士、と、今、と、金、う、ち、お、と、極、め、て、と、あり、て、
困、ぬ、と、い、へ、武、士、と、今、と、金、う、ち、お、と、極、め、て、と、あり、て、
て、中、機、嫌、一、入、能、中、し、お、ら、ぬ、名、を、言、の、人、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、
よ、お、し、所、説、り、は、さ、き、お、ら、ぬ、名、を、言、の、人、と、さ、さ、と、た、あ、耐、の、も、
虎、角、の、市、説、と、い、へ、武、士、と、今、と、金、う、ち、お、と、極、め、て、と、あり、て、

とて人殺し三つのおもひの御手紙と作り我子孫計りて誰人なりとて又投棄致
ふの中より、宝くねの衆と將て軍中より難と定うてとてあゝもんが爲の信玄軍法
めはと定て又扱又軍法の後を別と一卷有り

一 内務御理正曰く、昔頼朝公が佐助公より侍と致は公の討ふに都へ上りてお上り佐都に
有と致は公の重き侍三郎が盛徳と云ふとて同家とて我君より又佐助公より重き
とてお上りて佐助公より重き侍三郎が盛徳と云ふとて同家とて我君より又佐助公より重き
所人正尊が侍三郎と云ふとて同家とて我君より又佐助公より重き侍三郎が盛徳と云ふ
隠家とて同家とて我君より又佐助公より重き侍三郎が盛徳と云ふとて同家とて我君より
所人の官人致金よて武士のしるしとてお上りて我君より又佐助公より重き侍三郎が盛徳と云ふ
弱敵の下より我君より又佐助公より重き侍三郎が盛徳と云ふとて同家とて我君より又佐助公より重き
心偽る事とて我君より又佐助公より重き侍三郎が盛徳と云ふとて同家とて我君より又佐助公より重き
心偽る事とて我君より又佐助公より重き侍三郎が盛徳と云ふとて同家とて我君より又佐助公より重き

鳥の子と十つ、十をきぬとて女、こころ、おのまぐらうとて

とあるとて、昔坂本八國の主、將門公と依るを討あつて、將門公若君の御乳人、

依るを謀とて文と通つて、將門の七人は愛じけりといふとてあつて
やよとある由乳人、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
正とてあつて、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
女侍と信玄公の侍とて、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
武士とておのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
一代弱く一代強し、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
ありあつて、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
下の方より。日野の彌生、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
賣つて、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
子とて、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて
おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて

一 或時、三枝の御守所、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて女、こころ、おのまぐらうとて

[illegible]

隠微はあつらひくも松本権助と云くすの原が成るなる故を我より何と人
 の同心是體の小身なる者とする偽服體の人がけし介いんごんはなるとと不愛なりある
 そこそ我々なるを諸君のやうに百姓をせし大なるのいんごんはな
 ささるる彼等といひやうは是と不知識と疑ふを松本権助といふと心算あると成
 とう程は為の平よりいひ彼等あるは偽服を信ふべしといふはのりて是なる人と智
 者とこそしやうめと馬場英忠といふは是の也

関東上野国峯の城主小幡上総守ハ信玄家へ軍人ありと信玄云河内將兵を以て上建、
小幡上総守本意はる以小幡ハ同公義隆の故に長兄信濃守算之を以て件モノヲの信
濃守弘治二年丁巳古き一と信玄公と相討大別武士ある故七年の島楢との
き永禄六癸亥の年は義隆義成父子も重が一黨と密に逆訴せり人を後小幡
上総と甲府へ召寄せらば所従も此方と難別仕し、河内所衆の傍代急よ縁辺の
作合有べきと厚集人依の者御座るといふの上意は小幡上総思ひ申すなり
よりは彼と建行能む可憐尉の心事は作中よりよく分るを上意は但ち少く返答

中々くよしといふ八段、古来上杉則政よりみそ意趣といひて越国の輝虎が懐かれ
同若小幡三河守家成の解をよみて欲と稱へ輝虎は日親といひて計畧なり其内の者と
悉く討つ此上洛と討つに仕る刻我亦甲冑を穿りあり信玄公の所扶持と謂ふも況信別
日向は放て五千騎の堪えなると仰付らるゝを後でぞ存願へ為念といひて偏に信玄公
の所忽ち取直せば何事と仰せも上意有き程さう一方のべしや此世を居る日や我亦
田舎ともなりと云ふ信濃守川邊治兵衛を何方にとあづさうなくして女房新
あくと流浪路をゆく田舎の恥^{シツカイ}悉く小幡上総が忠告をしめる所成敗なりとて
とていふあるが如く離別の中なることけり通事也去程は因縁元早人元小幡宿
地たる上総を恨むは三強を多しし事なをも何故はゆふといひいと過ぎ事
ぬ信玄公小幡の世通事と仰し。ゆかりを叫んであり。その地をこそ武田信玄が
先手と仰てもそのところを事としそ方ハお子上杉則政の所ける家の作法
かと難ひて如何なれば上六義理の正一と道は免じゆるをとり信玄公所
差うてそを常務なりといふ典廐と小幡上総守解。なるなりと也

因縁物理の方の母死を以て世陽旅一向宗は色々と申列の内々ありきと云々の一向坊主悉く
来り去れば何れも此の如く死人の體いふ事とん事は肉身中切らる時一向宗の出處を中々
我々宗の如くして由阿弥陀極よく食と進上せしむるべくいふ事と云々とす
亡者はむけに肉身をさうとそれハ何とせん法外なる立派なりとあれども上人阿弥陀
こそ肝要の色服を食をゆるぐ迷の心こそ一向宗の一向宗とわがくはれるとい
はるゝ肉身をさうと死者つたなりと上人若し云阿弥陀極よく食とゆるぐハそれ
悉く直生へ施しはるといふ事も肉身を食としてさうも解揚し他宗は遠きを造
作とゆふべき也宗をわが一尊の施し美人の体とハ解り愛する重宝なり
一向宗とは養育上人悦び去れば我々宗は解揚あるをな——上人ソんげんこ
れをハ内縁物理自身上人の體とてゆふ百人飯の場を達一切衆をさうは
いふんとゆふとて腹とこハそれこそ肉身をさうとせんやう門下の達である
上人さうありて腹の場を達腹一まいかと説いてぬかしそハその後ハ坊主
建院言して亡者の腹とて口腹の場をも何れの如くは物なりと云ふ因縁物理

家室を失ふ者多きありし出る者多し一人にほし世の家とある程なれば何ぞ武道よ
 忍びざる可なりと余如の不意を更んとは惜しみて自害之傍に身を是を厭ふとい
 つきぞ北地中ハ腹と切も杯と云事成侍中なりと云ふに事分しといふて自害
 せんとすなりと據切より色は膝の上大なりと云ふと腹は十二三刀実より三日
 の間は山崎大に落ち目付様目の中上なる事あり言上路に信玄公討て之介
 中後立是事なりと云ふ事三節も通悉しし熊手政易よりべきは承集人依
 三枝幼少なりと云ふ事と云ふ事三人の名ありて熊野の年王の裏に柳を紙と仕り
 小地をぬれぬ所仕りてを不_レ致_レ中よりそ後信玄公討て之介よりさうばをそ
 柳をぬれぬ山崎の中者大場氏ありと云ふとありて右三人承集三枝を信所
 有ある則ち又長坂跡部は目付元二人横目元二人は熊手ら色を蒙るのみと云ふと云ふらん
 是れしめし岩戸大盛れと云ふ事と云ふと云ふけと云ふ付所定人数と云ふ山崎中より如く
 何れのと云ふ大場氏多しと云ふ山崎中よりと云ふと云ふ大場一丸_{コト}及_{コト}所成敗と云ふ山崎
 三帝多事御幸公中より内是程迷惑なり事成は是れしそ後信玄公作_さお_さ

六信玄が各とあふ事、各とあふるといへば、唯信玄が身とあふるに如く
 なるを長々と集め多く揃ひ一軍うんとする。一軍は勝つと取返げんといふ
 事とあふと取返げてこそ上には恩とあらうといふことぞんだけ平領を取て
 その上は又増知れとあらし立身してこそ侍の本意なり。彼本意といふ侍
 大小小者とも著く^{アツキ}五分よりひねる^振はゆるき大勝負のこゝろぢやらん
 彼ハ日月の光り。而し日光月光河し。和まづしぬ。今ぞ和なく思ひ目撃
 の有きお色くく斜に如件。和なきと日輪利支天と申す事を磨利支天ハ
 方丈の神をよーよんと脱ぎ軍配當處とあり。神解と成しぬ。今ぞ和なき
 松子侍の事らや及び以下に近訴とりさバ告来れと止人気取兩人所中居臥
 あ人は金子に西村せ水地が申仕る甲列東郡清白寺と申すをささじたり
 信玄孫子の旗を作らぬ其疾風其孫山林侵掠如火不動如山と云語之を以
 一の族其疾風の四字と添付て内なる傷高報等とせん。今時多傷中なるハ段文
 の意とも不変君の意りとも不知して中ハたなき事ながら風の字と似て軍隊の

一 信玄逝去し中と告る時謙信腹中飲食の事連信玄死去の事と多し者と
捨ると抄て曰ふ數の條おもと多し相もく力と居しううそ上信玄を望み
ある英雄名おちりしは跡り多く惜し事くとも後漢數りなりしと云

一 永祿六年謙信三十三年の二月十一日一族後代の事と云集りしるハ我八里
一と云はる處流なりといふ世の轉變より不意に長尾の家督と継ぐ
能くも必しも然るを我嘗て本意の事と思ひしを子細き春秋左氏を讀み
其國歴代の事迹と考へ又と平朝の書傳と云る纂奪の汚名廢立
の漸徳賢明の討論万世の事跡題えういふ今又中と云ふ一と事あれ
どと紋所を卷る一旦の恨といふ主君房能と云裁又若領頭定と討あり
世遂威と旅ひの事又天璽勝るに遂に敵中うて今と勝されぬも又屋
形定實云の今といふから先勝事と討事と載の悪名と然るに由家の為
は大臣といひ身の誅と不顧はれは一生まゐると不置と云ふ世の人と謝
世上を強持戒清淨の事と云ふしと云ふ不識院の元謙信法下と云ふ
とされり

一 天正二年九月大所謙信 徳意圖七危の城と攻めし日月十三夜明日かた七
尾の城を待合の會あり謙信

露満軍營 秋氣重

數行 五ノ月三ノ更

越山 併得能州京

仕他家卿 念遠征

又連年の事句 謙信

月 沈みたる 秋の夜

そ後敵方の細るありと 謙信

建武より隆の城と楯の器と云ふ妙のし相の 初雲

その氣報中陳の時魚津城とて初アと云て 謙信

その文の隆の城と云ふと云ふと初アのこゑ

右の介一代の侍を多し陳中うらの作多し別將を色風雅なる人
在東面なりうと一糸并を兼る地圖を右大長公館のより謙信が入る三
細云公亮は源氏初代佐助の傳授と云ふ紹興と云ふ事易は茶と云ふ

松本とお定より誰人とも構はねば其命をさすの事ありしを後上野守より上りて後信長に告ぐ
しに上野守の各望せしむるに後信長も其言を信ぜず又武田勝頼十ヶ九ヶ我中八ヶ九ヶは
あらず退きしなりと有りて信長も其言を信ぜず進上りし勝頼公を其言を信ぜずと有りて
其の甚しき所養ひの祖父松田信忠と大別の考を信長公に信長公は二代奉公中信長公
の所代は上野守を討死せる其の祖父松田信忠を其言を信ぜずと有りて進上りし勝頼公を
大別の考を信長公に信長公は二代奉公中信長公の所代は上野守を討死せる其の祖父松田
信忠を其言を信ぜずと有りて進上りし勝頼公を大別の考を信長公に信長公は二代奉公中
信長公の所代は上野守を討死せる其の祖父松田信忠を其言を信ぜずと有りて進上りし勝
頼公を大別の考を信長公に信長公は二代奉公中信長公の所代は上野守を討死せる其の
祖父松田信忠を其言を信ぜずと有りて進上りし勝頼公を大別の考を信長公に信長公は
二代奉公中信長公の所代は上野守を討死せる其の祖父松田信忠を其言を信ぜずと有り
て進上りし勝頼公を大別の考を信長公に信長公は二代奉公中信長公の所代は上野守を
討死せる其の祖父松田信忠を其言を信ぜずと有りて進上りし勝頼公を大別

上列(お)大胡山上勝頼は其言を信ぜずと有りて進上りし勝頼公を大別の考を信長公に
信長公は二代奉公中信長公の所代は上野守を討死せる其の祖父松田信忠を其言を信
ぜずと有りて進上りし勝頼公を大別の考を信長公に信長公は二代奉公中信長公の所
代は上野守を討死せる其の祖父松田信忠を其言を信ぜずと有りて進上りし勝頼公を大
別の考を信長公に信長公は二代奉公中信長公の所代は上野守を討死せる其の祖父松田
信忠を其言を信ぜずと有りて進上りし勝頼公を大別の考を信長公に信長公は二代奉公
中信長公の所代は上野守を討死せる其の祖父松田信忠を其言を信ぜずと有りて進上り
し勝頼公を大別の考を信長公に信長公は二代奉公中信長公の所代は上野守を討死せる
其の祖父松田信忠を其言を信ぜずと有りて進上りし勝頼公を大別

一 長祿の誤信より後信長公の武成と日比忠勝一は六
弥今迄の合戦勝利の爲とて説言の連言と無行せしむる

松本より 此とくひ ちきと月う 信長
かうきと見へぬ 卯のふめと 夕庵

多き書といひて軍國の事情と能く書取らるる虚と入疑ひに授けし家
 事と讀みし物と古人と云ふ也細色とて事実と案しとて志と考へて大に
 惑ひなん事必成ふ川中鴻九月十日の合戦の事と記せしよりして是と論じ
 信玄の敗ゆる事疑ふべし此れ外に別は仲らふ敵後の勝已の別は勝るる甲州
 の勝と記せし軍八芝居と勝へるをいふ勝とて事成甲陽軍鑑は論ひ明白
 也然るに今日の敵信玄芝居と勝へるに一と云ふべし此れ山岸勘助が軍
 鑑に分けし一とて二百の長と二百の子信信の陳西条山とて合戦とぬのちを
 敵後の軍勝た負る川と銀、越へるを旗本組二陳とて首尾と撃んと謀
 りし也然るに信信客敵ぬるはよふ勝利と惜うる敵後は別は是を極りし事
 也是客敵の勝は勝るべしとて定く其地はあつたはさし勝つとてこそと云
 へば信玄芝居と勝るといふは勝といふべし此は又信玄芝居と勝るとも
 云ふべき其糟過ぎ厚川と改りて三日歩くと甲斐を押あそし軍ある
 事能くさるは敵後の軍芝居と勝へるは勝なり是は又一老人の物語と傳

一 幸有信玄嫡子幸信と教さきしハ結城の終言ありしといふを實平川
 中嶋より信玄幸信將ル^{コサ}擁リて信玄ハ廣瀬の方へ引退く敗軍と云ふなり
 幸信と教^{コサ}ありて^{コサ}擁リて^{コサ}擁リし^{コサ}幸信深く恨と含めるといふ^{コサ}廣瀬は不知及て
 教さきしに至るとも信玄其傷と^{コサ}幸信^{コサ}廣瀬^{コサ}と^{コサ}近^{コサ}うるといふ^{コサ}幸信^{コサ}廣瀬^{コサ}と^{コサ}言^{コサ}ふ^{コサ}と
 と云ふなり是ニ^{コサ}信^{コサ}行^{コサ}ふ^{コサ}と^{コサ}其^{コサ}精^{コサ}と^{コサ}川^{コサ}と^{コサ}流^{コサ}る^{コサ}の^{コサ}後^{コサ}廣^{コサ}と^{コサ}定^{コサ}む^{コサ}と^{コサ}言^{コサ}ふ^{コサ}と
 以て是^{コサ}は^{コサ}甲^{コサ}陽^{コサ}軍^{コサ}艦^{コサ}ハ^{コサ}其^{コサ}精^{コサ}と^{コサ}教^{コサ}亂^{コサ}セ^{コサ}と^{コサ}記^{コサ}する^{コサ}と^{コサ}虚^{コサ}妄^{コサ}なり^{コサ}幸^{コサ}論^{コサ}と^{コサ}い^{コサ}ふ^{コサ}と^{コサ}其^{コサ}
 精^{コサ}三^{コサ}芝^{コサ}石^{コサ}と^{コサ}記^{コサ}する^{コサ}。幸^{コサ}信^{コサ}何^{コサ}事^{コサ}に^{コサ}根^{コサ}拠^{コサ}し^{コサ}と^{コサ}主^{コサ}從^{コサ}二^{コサ}人^{コサ}を^{コサ}梨^{コサ}山^{コサ}と^{コサ}な^{コサ}る^{コサ}と^{コサ}記^{コサ}する^{コサ}と
 幸^{コサ}信^{コサ}其^{コサ}其^{コサ}軍^{コサ}源^{コサ}之^{コサ}所^{コサ}に^{コサ}傳^{コサ}り^{コサ}如^{コサ}く^{コサ}ある^{コサ}を^{コサ}甲^{コサ}陽^{コサ}軍^{コサ}艦^{コサ}に^{コサ}記^{コサ}セ^{コサ}ハ^{コサ}明^{コサ}く^{コサ}い^{コサ}ふ^{コサ}
 初^{コサ}の^{コサ}合^{コサ}戰^{コサ}ハ^{コサ}お^{コサ}揚^{コサ}て^{コサ}己^{コサ}の^{コサ}時^{コサ}を^{コサ}境^{コサ}と^{コサ}し^{コサ}の^{コサ}所^{コサ}に^{コサ}あり^{コサ}と^{コサ}い^{コサ}ふ^{コサ}と^{コサ}記^{コサ}する^{コサ}と^{コサ}又^{コサ}甲^{コサ}陽^{コサ}軍^{コサ}艦^{コサ}
 ハ^{コサ}長^{コサ}坂^{コサ}鉾^{コサ}所^{コサ}に^{コサ}大^{コサ}火^{コサ}を^{コサ}起^{コサ}す^{コサ}二^{コサ}人^{コサ}と^{コサ}其^{コサ}曲^{コサ}の^{コサ}所^{コサ}に^{コサ}勝^{コサ}れ^{コサ}電^{コサ}セ^{コサ}ら^{コサ}と^{コサ}一^{コサ}事^{コサ}決^{コサ}然^{コサ}く^{コサ}憤^{コサ}を^{コサ}う^{コサ}と^{コサ}
 幸^{コサ}多^{コサ}う^{コサ}は^{コサ}之^{コサ}二^{コサ}人^{コサ}權^{コサ}と^{コサ}う^{コサ}幸^{コサ}一^{コサ}種^{コサ}に^{コサ}始^{コサ}る^{コサ}と^{コサ}此^{コサ}ハ^{コサ}信^{コサ}玄^{コサ}の^{コサ}時^{コサ}に^{コサ}電^{コサ}セ^{コサ}ら^{コサ}し^{コサ}左^{コサ}胸^{コサ}に^{コサ}
 至^{コサ}り^{コサ}て^{コサ}終^{コサ}威^{コサ}に^{コサ}あり^{コサ}と^{コサ}信^{コサ}玄^{コサ}の^{コサ}時^{コサ}に^{コサ}幸^{コサ}乃^{コサ}是^{コサ}に^{コサ}始^{コサ}破^{コサ}の^{コサ}色^{コサ}を^{コサ}う^{コサ}し^{コサ}左^{コサ}胸^{コサ}に^{コサ}電^{コサ}セ^{コサ}と^{コサ}記^{コサ}し^{コサ}
 中^{コサ}に^{コサ}甲^{コサ}陽^{コサ}軍^{コサ}艦^{コサ}に^{コサ}載^{コサ}せ^{コサ}ら^{コサ}と^{コサ}い^{コサ}ふ^{コサ}と^{コサ}知^{コサ}る^{コサ}べき^{コサ}也^{コサ}又^{コサ}云^{コサ}傳^{コサ}へ^{コサ}し^{コサ}説^{コサ}ハ^{コサ}甲^{コサ}陽^{コサ}軍^{コサ}艦^{コサ}と^{コサ}著^{コサ}キ^{コサ}一^{コサ}意^{コサ}

中は傑出せらるる草創の功を遂せし何れぞ自らの徳は若しあるべきや梅ざらるる
信玄を身と使ふと本とし不敗の地を立す小利をばて大勝は得て人々は得ん
と思ふべしやうしふ失ふらん事や昔とんあき勝軍二回や大勝て不敗は是
と云ふ初め事危あつたべしと信威と他はや言ふの也 又曰く大志曰く修身齊
家本く治世平天下末く孫子と云ふ金一上とし破敵攻めといはるる
本と使ふと要といはるる或は本乱をそふ乱る者なりと云ふ是を以て
考ふれば信玄の軍づからあきなりと云ふし何れと云ふ功を遂けずなく
一生を衛々のつたは若し一國戦の中は聲死せざるや 若し曰く信玄修身
金一上といふ文武を旨とせし正兵と云ふは是非を實と相難
況や正奇変化の利鋒をさあやそと云ふる名聞ハ完一といふ利路速うなり
又同敵家の心を知り強弱を備へ盛衰の勢を見くを利と云ふは備は正奇兼
備は是非や 若し是奇正の術なりと云ふは虚實の機ありしむる者も信玄の
術正しと云ふ偏くといふ對ふ敵己が勢分と不拂く虚と云ふは實と云ふ

があらはれざるを自道とて勝利ありきあり凡虚實と云ふは勝なり奇正と云ふ
は利なり我れ愛どて敵と動はなりと云ふは奇正自道と云ふは勝なり奇正と云ふ
俱は実正と云ふは對ふ信玄の云自道高き彼奇正展轉の術ありきしと云ふ
勝虚と云ふは實あり自道清くして利と云ふは勝なりと云ふは勝なりと云ふは勝
云の云自道奇と云ふは勝利と云ふは又實格備得ざるなりと云ふは勝なりと云ふは勝
信玄孰も一徳一術と云ふは得て得て威と並ぶる立たる者こと知べし

一 長尾謙信と評して曰く凡そ謙信は性強毅といふ言は難偏純類の徒將より後継の
徳と云ふ東海に陸は威と輝し故と云ふ畏きと云ふは勝なりと云ふは勝なりと云ふは勝なり
は信と云ふ信と云ふは軍立衛疾と云ふは奇正変化の行戦々任々如く大勝ありと云ふ
折は急迫の時に云ふは早夫と云ふは怖る心なりと云ふは勝なりと云ふは勝なりと云ふは勝なり
かく士氣を使ふ四民の身はおほく云ふは勝なりと云ふは勝なりと云ふは勝なり
是より凡そ役は名を賞し内は着る物なりと云ふは勝なりと云ふは勝なりと云ふは勝なり
流しと云ふは流の深きと云ふは勝なりと云ふは勝なりと云ふは勝なり

創は十倍に上りて房玄齡の如く草創の難き事を守文がとるなりと云ひ
を討太宗宣ひたる云々然ハ^{ワタリ}仕付朕は従ふ此の事は辛苦して也^モ此創
の難き事を知り親微をたすの時仕つ又守文易かざる事を知るこれ
とも此創の難き事を守文がとるなり又守文の易かざるは付て左平と
いへんとも宣ひたる守文草創二つながら能やぞんを俱は將はさむべ
先康信玄謙信の三おりのもと一徳一のものと得一と云ふし一たび是圖^{アタリ}一たび
を否^{イナ}びむと一とき事はお午角なるべし又或人云信玄謙信氏康智常
あつく一徳を保ちのひるは武功を致す施して四海を吞み八荒を寧む握^{ニギ}
ありと云へも其威と三分の一東北は是とお辛い一人ともよく功を天に著し
卒にとゞ信長後よめて^{サセムゲ}助なく草創の功あると思へ爾久ハ是非よあると
いづども是非をあつて運よある信玄謙信氏康天幸の福うけたり一人は
中江離れず是非の評より^{フミヤ}あるべし信長もし不幸なりば其中は生きたる
一人善將の名を樹べらば信玄謙信氏康三將の是非を論じり事ハ信長の

奉^{コウ}運の一字は落着せんかといふに、沛き又何の事ありとぞ。梅は是非を運
 の否^{ヒタイ}泰は概^{カネ}と云く人として知愚あふべし。運は是非は依ると云べし。人は壽夭
 福災の移りあふるを、顛倒の貧乏として經る。有る過積が一生概と云ふものの移^シは
 非の外は非と云ふなし。抑^{ウツ}云は是非は運よりある。運は是非よりある。這^{エヤリニ}程向く大事
 と不曉^{フセウ}者ハ當道の奥方と見る事あり。是非と云ふ論ある時、夏ハ高^{タカ}は建^{タツ}
 禁と變^{ホホホ}し高ハ成湯の興り、紂^{シュ}は是と上代の桀^{ケツ}と云ふ。是と云ふ本邦の靈表
 と觀^{ミル}は楚^{ミロ}を客^{ヤアサ}とて天下を失ひ、漢をちなはしとて天下を保^ホつ事と云ふ。り
 平治ハ信然、劉^{リウ}秦^{セン}亡び、清^{セイ}盛^{セイ}秦^{セン}ありと秀^{ヒメ}づ。高^{タカ}平氏^{ヘイシ}奢^セ侈^チ積^{ツク}て、
 賴^{ライ}烟^{エン}溫^{オン}良^{リョウ}として天下を覆^{フク}するを、非の數^{スウ}や。或ハ否^ヒ或ハ是^シ或ハ智^チ或ハ愚^ユは
 一^{イチ}の時と同^{ドウ}じとして、其亡を地と更^{カフ}る事。古今竹筭^{チクサン}と云ふるが如^ガキ、是非運を
 是非の外は非と云ふなし。又明^{メイ}らけし又運と云ふもの、秦の盛^{セイ}衰^{スイ}を、橋^{キョウ}と空^{クウ}躬^{コン}
 孔子を更^{カフ}は位と得^{トク}ぬべし。孔明を軍旅^{イクサ}に死^シして仲達^{チュウダツ}乃^{イニ}勝^{シツ}事と云ふ。り
 是れ我^ガ朝^{チョウ}の平氏^{ヘイシ}正成也。暫^{シヤウ}といふ運を、是非よりある。是非を運よりある。敢て問^ト

頌ひを乞ふ一の七書とありしよりちて天下の武人将軍と傳誦しを遍興
は熟達せんと欲せり天下の今の書と集めて一を姓名の生記とあり且意
味深く理平一を書と撰んて七書とあり人ぞ容易の事なりんや知るや
此世の儒学者等已に七書とする四書六經の大意といふも心持だんや武
經の類ハ七書の名目とのとせしむる計りありて故葉の事ハ端トて六韜ハ
大ハ韜の事トせしむる後人の作ト三略ハ黃石老人の作トつる事いふがし
黃石老人の著トせしむる西一やハ理をば一而用をば二ハ杯とらば理をく
さつりけるは海の士とありと學力ある人の詞をばハ理の勳をばなく
是と云ふ實とつてはを書と學とせざるの事ハ且己が職業よりとく
へはとあるものの費あり凡書ハ意信をくくハ用捨の所とある仍べし
六韜三略の作者を明かする中ハ古人は傳ありある人ハ糟とわん
て是人の計とせざるも又天子を爲すの佐とひつべしと云ふ作意ハ惟
とせよと書一のひるありんばを理の用とくハハ理長日馬の事といふ

後漢の作者不仁不孝の人とあるを例はつる事と撰んや聖人の儒子論
脈の所と感し其の書ハ理をくくハ用捨の所とある仍べし
は有難き教戒とせしむる豈作者の知法と傳してを書と用捨すべきや
其の書ハ不正あり二書ハ韜ハ兵家國家と治め勝利と制するの樞要
ありて武家一書とありては此書也と云ふ信してを理とくハハ理長
儒者の四書六經と傳誦するが如くありんば——其意味の理長なる事くくして
熟達せしむる

福がし—— 卷之四終

明治 24438 号
昭和 13 年 7 月 31 日



477

